

王を 目指す 一夏と 苦勞
人ウオズ

ワタリ3

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第1期編

王様を目指す普通の高校生『織斑一夏』には将来『魔王』になる運命が待っていた……はずだった。

未来からやってきた未来人『ウオズ』は織斑一夏が一年以内に魔王になれず死亡すると告げ、彼を魔王にすべく歴史修正と改変を試みるのであったが、それは茨の道であった……。

なぜ一夏は一年以内に死亡することになっているのか……その原因は謎の妨害者と一夏に取り巻くヒロイン達にあった

目次

第1期 王道編

第一話	王を目指す一夏と未来人ウオ	1
第二話	IS学園入学初日！	22
第三話	超越 前編	54
第四話	超越 後編	83
第五話	怒りのドラゴン 前編	100
第六話	怒りのドラゴン 中編	130
第七話	怒りのドラゴン 後編	154

第八話	ギンギラな悪夢	178
第九話	宇宙の彼方の：	187

第1期 王道編

第一話 王を目指す一夏と未来人ウオズ

『織斑一夏』は王になるの夢を持つちよつと変わった少年だった。

ある日、自分の姉が出場するI Sの世界大会『第2回モンド・グロッソ』を観に行くため

ドイツに向かうも途中何者かの襲撃に会い誘拐されてしまう。

この後彼に待ち受けている運命……私の知る歴史では織斑一夏はこのまま『魔王』への道を歩むはずだったが……

現実はそう甘くない。

「ふあくよく寝た。」

「おい！人質がなに伸び伸びと寝てんだよ。」

「ああ、ごめんごめん。」

織斑一夏は自分の置かれている状況に不安や恐怖を一切抱かずのんびりとしていた。

寝起きでぼーっとしながらも辺りを見渡し状況を整理する。

場所はどこの廃工場、男が三人に女が一人

男性二人は自分にアサルトライフルを向け、もう一人はスマホで何かのライブ中継を見ている、流れてくる実況から察するにおそらく自分の姉『織斑千冬』が出ている試合を見ているのであろう。

女性は少し離れた場所で通信機を取り出し何処かに連絡を取っている。

最後に自分の状況も確認する。

体は頑丈に縄で柱につながれており、身動きがうまく取れない。

しかし、織斑一夏はこんな絶望的な状況でもどこか余裕の表情を見せていた。

「織斑千冬が試合に出てる!？」

「どう言う事だ! 情報はちゃんと通達済みだぞ!？」

「まさか見捨てた? そんなはずは無い! 彼女は弟思いのはず。」

誘拐実行犯である男三人は焦りだした。

モンド・グロツソでの織斑千冬の試合放棄を目的としたこの誘拐作戦が失敗に終わったからである。

唯一の家族である弟が誘拐されたと知れば織斑千冬は試合を放つてでも助けに来ると考えた3人の誘拐犯達は望まない結果を目の当たりにし絶望する。

「・・・これだから男は。」

通信を終え、そんな男達の失敗にため息をつきながら女性は次の指示を男達に出す。

「弟を殺せ。」

「しかし、相手はまだ子供だ！」

「関係ない。それともなんだ？従えないのか？」

「い、いえ」

男達は彼女に逆らえない。

女尊男卑の時代だからというのものもあるが、彼女の背後についている

『ある組織』に対する恐れが大きい。

「私は片付けの準備をする。さっさとやるんだな。」

女性が部屋を出ると男達は銃を一夏に向ける。

「スマン、悪く思うなよ小僧。」

「俺たちの為死んでくれ。」

「すまない。」

「えつと・・・。」

男たちは少し訳があり、多額のお金が必要だった。

それを察してか一夏は苦笑いしながらもこう続けた。

「……まあ貴方達も訳ありつて事で許すよ。」

「小僧……。」

「民が謝つたらちゃんと言す！それが王様でしょ？」

「言つてる事が無茶苦茶だが、いい奴だな。」

「でも、ここで死ぬのは困るな。おじさん達も俺を殺したくないでしょ？だったら俺を逃がしてよ！」

「おじさん達は子供を殺さなくて済むし俺も逃げられる。ほらこれでWIN—WIN—WIN—」

一夏は笑顔で懇願する。

「無理だ、俺たちも後がないんだ。」

「娘の薬代のためだ！」

「許せ小僧！」

「ちよちよちよマジか？マジで！マジか！！やめてえ！！」

ようやく自分の状況を理解した一夏は悲鳴を上げるが

男達は無慈悲に、震える指をトリガーに掛け思いつきりそれを引く。

銃撃音と共に一夏に向けて無数の銃弾が発射されるが……

『タイムマジーン！』

それは一夏に当たる事は無かった。

突如、巨大な金属の塊が一夏を守るように現れ銃弾を防いだのであった。

「うわ!?!なんだ!?!」

「IS!?!」

「あんなIS見た事ないぞ!!」

ISは人間が纏う様な形状をしているが、目の前に現れた全長7m以上の巨大な金属で出来た人形はISの特徴に全く当てはまらない。

正しくアニメに出てくるような巨大ロボット兵器だった。

目に当たる部分にはカタカナでライダーという文字。

銀色を中心とした機体色に蛍光色の黄緑ライン。

近未来的なデザインをしたロボットは男達を見下げていた。

「う、撃て!!」

男達同時にロボットに向けて銃を連射するが巨大ロボット

『タイムマジーン』にダメージを与えるどころか傷一つ付けることは出来なかった。

『邪魔だ、失せたまえ。』

タイムマジーンから男性の声が響くと同時に男3人を巨大な脚部で

足払いをし男達を蹴り飛ばす。

「うわああああっ!!」

情けない声と共に男達は天井を突き抜け

遙か彼方遠くへ飛び去ってしまった。

『(無事なように安心したよ。』

一夏は啞然としていた。

それもそのはず突如現れた謎のロボットによつて

理解するまもなく窮地を救われたからだ。

タイムマジーンのロボと書かれた胸部パーツが縦に開くと

中から奇妙なタブレットPCを持った男が降り立つ。

見慣れない服装に長めのマフラーを巻いており、どこかミステリアスな雰囲気醸し

出していた。

男は一夏の拘束を解き彼の目の前で膝をつき頭を下げる。

「お初にお目にかかります、過去の我が魔王。」

私の名はウォズ。未来からやってきた貴方の忠実なる僕です。」

「えつと……」

何やらよく分からない単語が出てきたことにより困惑する一夏。

それを御構い無しに男は懐からある物を取り出す。

「今の銃撃音で女が戻ってきます。さあ、こちらを」

ウオズと名乗った男の手には白い懐中時計の様な物が握られていた。

「ん？なんだコレ。」

「白式ミライドウオッチ…あなたの未来の専用機です。」

ウオズはリユーズをボタンの様に押す。

『白式!!』

白式？白式って？

そんな一夏の疑問をよそにウオズはその懐中時計を思いつきり一夏の腹部めがけて押し込んだ。

「ん？お？！」

白式ミライドウオッチは一夏の体内に吸収され一夏に力を与える。

「いまI Sを授けました。さあ今こそ目覚めの時です。我が魔王。」

「いきなり何するの!?!それに魔王って?!」

「説明は後です。さあ早くI Sの展開を。」

一夏は完全に置いてけぼり。

外から先ほどの女性が異変に気付いて戻って来る。

突然現れた男ウオズに驚きながらも冷静に自体を見据える。

「貴方、何者？」

「今から倒される者に名乗る名などない。」

「っは！男が調子に乗るんじゃない！」

女性は自分用にカスタマイズされたIS『ラファール・リヴァイヴ』起動させ銃口をウオズに向ける。

ウオズはその状況に焦ることもなくやれやれと首を振る。

「おつと挑発に乗ってしまった。早くIS展開してくれ我が魔王。」

「んなこと言っても、男はISは使えないって!!」

「・・・仕方がない。」

ウオズは持っていたタブレットPCに文章を記入する。

『織斑一夏はIS白式を展開するのであった。』

「はあ?いったい何を・・・。」

何を言いだすんだ と言おうとすると無意識に口が動く。

「来い!白式!!」

本当に無意識だった。

掛け声と共に白い鎧が一夏纏われ、そこに未来のIS『白式』が君臨する。

「男がISを!!」

「本当にISを展開しちゃった。」

驚く二人を尻目に、ウオズは手を広げ声高らかに叫ぶ。

「祝え！新たな未来を創造し、全てを断ち切る王者の羽衣

その名も『白式・雪羅』今まさに魔王の歴史が始まった瞬間である。」

「祝えつて…急になにを言いだすんだよこの人。」

「…男がISを使えたところで何だ…私の敵ではない。」

女が銃口を一夏に向けると白式からロックオン警告が鳴り響く。

「さあ、我が魔王。大いなる力を存分にお使ください」

「俺は初心者だけどな…でもなんだか行けそうな気がする！」

ISを纏えば同じ土俵、そんな甘い考えを持ちながら一夏は荷電粒子砲を女にめがけて撃つ。

しかし初心者のお粗末な射撃が当たるはずもなく、女は躲しながら的確に銃撃を白式に浴びせる。

「大した事ないね！」

「つち!!当たり前だろう!初心者だから!!」

反撃の荷電粒子砲…しかし当たらない。

「つくそ!他に武器はないのか。」

「雪片が備わっています我が魔王。」

「雪片って千冬姉と同じ!？」

一夏は雪片式型を装備するが相手の猛攻から身動きが取れない。

「でも、どうやって近づけば!」

「腕の武装『雪羅』は射撃だけではなく防御機能も備わっています。」

「そうか! だったら!」

腕部に装着している『雪羅』からバリアを展開し射撃から身を守りながら強引に距離を詰め接近戦に持ち込もうとするが相手はIS操縦のプロ、そう簡単にはいかなかった。

「くっそ! 逃げんな!」

「あはは! 弱い弱い! そんな程度で私を倒せるのかい?」

状況は一夏の完全不利。

しかしウオズは焦らない、何故なら一夏が勝つと分かっていたからだ。

剣術経験がある一夏のポテンシャルと女の行きすぎた慢心と油断。

そして未来の技術で改良された『白式』

可能性は低いが少なからず一夏が勝利する未来が存在していた。

後はその勝利の未来を彼が導くだけ。

「『織斑一夏は僅かな隙を見つけ 零落白夜を叩き込んで戦いに勝利するのであった。』」

「……そこだー！」

一夏は女のスキを見つける。

弾切れのリロードと一瞬の瞬き。

一見そこに叩き込むのは無茶だと思われるが、一夏の勝利は確定したものだ。

そのスキに吸い込まれるように、雪片を突き立て発動させた零落白夜によって、相手のISのSEは一気に消し飛ぶ。

「なっ!? こいつ動きがー！」

「うおおおお!!」

そのまま速度を落とさず相手を押し退け思いつきり壁に叩きつける。

「がっは?！」

SEが無くなったためか衝撃がダイレクトに伝わり女は軽い脳震盪で気絶する。

「……はあはあ……やった。」

それを見て安堵したのか力が抜け一夏はISを解除しながら地面にへたり込む。

「はあ……はあ……勝った。」

「お見事です我が魔王。

とりあえず歴史の改変は成功した・・・私はこれで失礼するよ。」

「お、おいまして！お前は一体なんなんだ!？」

「その話はいずれ。」

「うっ！」

一夏はウオズに詰め寄るもウオズから放たれた謎の力によつて

強烈な睡魔に襲われる。

「もう少しで織斑千冬が君を助けに来る。

ここで待つてるといい。ではまたお会いしましょう我が魔王。」

『タイムマジン!!』

ウオズはタイムマジンに乗り込みこの時代を後にした。

「…いったい何が。」

その後、試合を途中放棄した織斑千冬によつて織斑一夏は救助された。

事情聴取されるも巨大ロボットや謎の男が助けに来たこと、自分がISを纏つて戦つたことなど当然言える筈も無く、ただ『気絶していただけ』と答えたのであつた。

それから一年後：ウオズと名乗る男はその後姿を見せず一夏はその事件で起きた出来事は全て夢だつたのではないかと疑う様になる。

体内にあるIS『白式』はその後の一夏の呼びかけに応じつ沈黙を続け、ウオズも現れない。

何事もなかつたように日常に戻つた一夏はいつも通りに朝食を作り、自分の姉に振る舞う。

「おはよう千冬姉」

「ああ、おはよう。」

泊まりの仕事が多い千冬が珍しく帰宅しており一夏は彼女を労つていつも以上に凝つた朝食を作る。

「朝ごはん、できてるよ。」

「ああ、すまない。」

互いに朝食を済ませて一夏は誘拐事件がまるで無かつたかのようにのんびりと過ごしていた。

「しかし、一夏……こんなのんびりして……受験勉強は大丈夫か？」

「ん？俺高校行かないよ。王様になるし」

王様になるから高校なんて行かなくていいよね？

そう続けると額にお盆が叩きつけられる。

千冬が投擲したものだ。

「いつだあ!？」

「はあ、何処で育て方を間違えたか……」

「何すんだよ千冬姉！」

額をさすりながら千冬につめよる一夏。

「王を目指すのはこの際良いとしよう……しかし高校は出とけ。」

中卒の王様じゃあかつこ悪いだろう。」

「それもそうだな……分かったよ千冬姉！」

はあ……と再びため息をつく千冬。

一夏の王様になる宣言は今に始まった事ではない。

幼い頃からずっと言ってきたことだ。

もう慣れてしまった自分に対しての自虐を含めたため息。

彼の保護者としてそろそろ将来について真剣に向き合いたいところだが

仕事柄忙しく、その様な時間を取れないでいた。

「はあ・・・私はもう出る、あとを頼むぞ。」

「おう！いつてらつしやい！」

千冬を見送るとさっさと皿洗いを済ませて冷蔵庫の在庫を確認

買出しの準備を始める。

「さてと、俺も買出しに行かないとく。」

戸締りをし、玄関を開けるとそこにはタブレットPCを持った男が立っていた。

ウオズだ。

「ご機嫌よう我が魔王」

「・・・夢じゃなかったんだ。」

「現実だよ。」

とりあえず家にながらせて、ウオズにお茶を出しながら

この前聞けなかった事を聞く。

「お前は一体何者なんだ？」

「私は貴方の忠実なる僕・・・。」

「いや、それは知っている！いや、それもまだ意味が分からないけど・・・俺が知りたいのは

お前の正体だ、何故俺を助けた？それにあのISは？」

「ふむ…では分かりやすく説明しよう。私は未来からやってきた未来人。

そして私は貴方を魔王にする為にこの時代にやってきた。」

「え、マジで？」

いきなり未来人と言われて普通は信じないが一年前のあの出来事がある故に思ったよりすんなり受け入れてしまう。

それよりも一夏には気になる単語がある。

「それに魔王って…俺って未来王様になるの？」

王を目指す一夏にとってそれが最も重要な事だった。

ウオズはタブレットPCを操作しそこに書かれている文章を見ながら口を開く。

「これは私がいた未来のお話。織斑一夏は最低最悪の魔王『魔王イチカ』として覚醒し世界を征服する…事になっている。」

「え、最低最悪？」

「ええ、圧倒的な力で全てをねじ伏せ、全世界を掌握し、恐怖で人々を支配した最低最悪の魔王『魔王イチカ』…私は貴方をその未来に導くため直々に…それは嫌だな。」

「はっ。」

一夏の否定に呆気を取られるウオズ。

ウオズが語る魔王は一夏が目指す王とは真逆なものだった。

「俺、将来は最高最善の王様になるって決めてるんだ。そんな最低最悪の魔王になるなんて考えられない。」

「…。」

「ごめん、せつかく未来から来たのに…俺は魔王になるつもりなんて。」

「しかし、そうも言ってられないのですよ。」

「え?」

意外にもウオズは最低最悪だろうが最高最善だろうがどちらでも良かったのだ。

「魔王になるのが一番いいが…私が見たのは別の理由がある。」

ウオズは深刻な顔をしながら続ける。

「貴方はこのまま行くと一年以内に死にます。」

「は?ええええええええええ!!」

一夏の叫びが家中に響き渡る。

「ちよちよちよそれってどう言う事なの!?!ウオズって俺が魔王になった未来から来たんだよね?何で俺が1年後死ぬってことになってるの!?!」

「現在時間軸に大きな歪みが生じ私達がいる未来が消失しつつあります。」

その原因が織斑一夏が王に至らず、ぽっくり逝ってしまったのが原因だと分かりました。」

「ぼっくりって…なんでまた。」

「それは私にも分かりません。だが、それを阻止するため私があります。」

「はあくまじかく。」

両手を床につき分かりやすく落ち込む一夏。

「俺どうしたらいい？俺どうしても王様になりたいんだ。」

「失礼ながら、我が魔王はどうしても王になりたいと？」

「んー分からない。」

「分からない？」

「うん、小さい頃から王様にならなきゃって思ってたから。」

「なるほど、どうやら我が魔王は王への素質が生まれつきある様だ。ならば私も全力で

サポートしよう」

「うん、ありがとう…で、俺はどうすれば王様になれるの？」

「そうですね…。」

ウオズはタブレットPCを再び開きなにかを調べる。

「さつきから見てるそのタブレットは？」

「これにはこれから起こる未来の出来事が書かれています。」

「へえー、なんて書いてあんの？」

「我が魔王がこの一年で50回以上死ぬと書かれています。」

「ご、50!?!なんで?!?!」

「さあ？」

まあ、あくまでも『死ぬかもしれない可能性が有る』という話です。」

そう答えるウオズだが、実の所、原因は分かっているがあえてそれを一夏に伝えないでいた。

「これを見る限り、我が魔王には早急にI S学園に入学してもらうのがベストです。」

「I S学園!?!」

「そう、その地が全ての始まりであり、織斑一夏という人間のターニングポイント。」

その学園での生活が未来を決めると言っても過言ではありません。」

「でもあそこは女子校だ!そんな所どうやって…」

「これによると我が魔王は受験予定だった私立藍越学園の試験場を間違えてI S学園の会場へ行ってしまう、その場にあったI Sを起動してしまった事で人類初の男性適正者として、I S学園に強制入学することになっている…。」

「え、俺そんな波乱万丈な人生が待ってたの!?!」

「でも、時期は早い方がいいか…」

ウオズは立ち上がる。

「外に行きましよう。」

ウオズの案内で近くの公園に来た一夏は、何故この場所に来たか理由を尋ねる。

「何故公園？」

「ほら、あそこに都合よく設備不良で墜落したISがあります。それに触れてください。」

公園の真ん中には何故か大きなクレーターができており中心には日本製の量産型IS『打鉄』が墜落していた。

「なんで都合よく墜落してるんだ!？」

「私は近い未来を操る事ができる。」

「この近辺で飛行訓練を行うと聞いてね、墜落させた。」

「墜落させたってお前とんでもないチート能力持つてる上に、なんてことをしてるんだ!!」

「さあ、今の内。」

一夏のツツコミを無視しウオズは一夏を腕を強引に引き墜落したISを見に来た野次馬をどけ、それに近づく。

パイロットは近くの公衆電話で本部と連絡しておりその場におらず、触れるなら今がチャンスだった。

「ああもう！」

一夏はやけになり、ISに触れる。

ウオズの言った通りISは一夏に反応し起動する。

「嘘…男がISを起動した!？」

「だ、大スクープじゃ!!」

「信じられない。」

「どうだウオズ！コレでいいだろ…ってあれ？」

周りを見渡してもウオズの姿は無い。

「また居なくなつた。」

これによつてIS適性が本来の歴史より早い段階で判明し、織斑一夏のIS学園の入学は受験シーズン前に決定することになったのである。

こうして織斑一夏の王を目指す学園生活が早い段階で幕が開かれたのであった。

第二話 I S 学園入学初日!

I S 学園に通う普通の高校生『織斑一夏』には将来『魔王』になる未来が待っていたハズであつた……。

時間軸が歪み歴史が改変され、織斑一夏は王に覚醒することなく一年以内に死亡するという偽りの未来に移り変わってしまったのである。

その未来を修正するべく未来からの訪問者『ウオズ』は、織斑一夏に『未来の白式』を与えることで未来改変を目論むのであつた。

しかし、これによつて歴史は大きく修正されるが、一夏が死亡する運命は変わらずにいた。

ウオズは新たな歴史改変案として予定より早く彼の I S 適性を見出すことで身柄を強制的に I S 学園へ移し

残りの中学生生活を I S 学園で過ごさせることによつて I S に触れる機会を増やし織斑一夏自身の強化時間にあてがうのであつたが……。

それから数ヶ月後。

正式に I S 学園の一年生として入学した、織斑一夏はこれから始まる女子校生活に不

安を抱いていたのであった。

「では、皆さん順番に自己紹介をお願いします。」

(はあくついに始まつちやつたよ。)

IS学園にいた時はほほ他の生徒に会う機会がなかつた織斑一夏は、初めて自分以外の生徒、それも女子を

目の当たりし、これからの学園生活に不安を抱いていた。

「織斑君お願いします！」

「はい！織斑一夏です。」

将来の夢は王様になることです！よろしくお願いします。」

副担任の山田真耶に名を呼ばれ、一夏は席から立ち上がり自己紹介をする。

しかし、王を目指す普通ではない夢を大段的にいう一夏に対し、他の生徒は困惑をし、中には茶化すように笑う者もいた。

「王様？」

「王様って・・・。」

「あはは！王様って！」

そんな反応に気づかず一夏は自己紹介が終わった事に満足し席に着こうとしたが、何者かによって放たれた首席名簿に頭部をぶつけ

頭を抱えるのであった。

「あいつだ!!」

「もう少し真面目な自己紹介ができないのか、馬鹿者。」

犯人は自分の姉、織斑千冬であった。

クラス担任を務める彼女は用があったのか予定より少し遅れて教室に現れた。

「つげ、信長!」

「誰が、魔王だ。」

「いつ・・・!!。」

今度はゲンコツを食らう。

「待たせたな山田先生。」

「いえいえ。」

「今日からこのクラスの担任を務める織斑千冬だ。」

この一年、お前たちを使い物にするためにピシバシ鍛えるから覚悟しろ。」

「「「「きやあああああ!!」」」」

織斑千冬の登場にほとんどの生徒が黄色い声を張り上げる。

「千冬様よー!」

「憧れでした！」

「あなた様に会えてもう死ねる!!」

「君のためなら死ねる!!」

「チフユーヌ!!」

それもそのはず織斑千冬といえは元日本代表選手であり第1回IS世界大会「モンド・グロツソ」で総合と格闘部門を優勝

無敗記録を持つ彼女は今は伝説と呼ばれている人物であり

彼女に憧れてこの学園に入学した生徒も多いのだ。

「騒がしい静かにしろ。」

それと急遽入学することになった生徒を紹介する。」

入れ!!」

千冬呼びかけと同時に、教室のドアが開かれる。

「え!?!」

入室した生徒を見て思わず一夏は驚きの声を漏らす。

ISの男性制服に身を包み、室内でありながらもマフラーを巻いており左手に見慣れないタブレットPCを持ち歩いているその人物は・・・

「自己紹介しろ、常盤。」

「私の名は常盤ウオズ・・・よろしくね。」

ウオズだった。

棒読みながら名前を名乗り、お辞儀をする。

その姿を見たクラスメイト全員が再び声を上げる。

「「きやああああああ!!」「」」

「男よ!二人目の男!!」

「このクラスでよかつたあ!!」

「めっちゃタイプなんですけど〜」

「あら、イケメンじゃない」

再びの大音量で一夏は耳を塞ぎ、山田先生と千冬が苦笑いをする。

「お前ももう少しまともな挨拶をだな・・・。」

「で、では常盤君の質問コーナーとしましょう!質問がある人は・・・」

「いえ、私は自分の事を語るのは苦手です、私の席は?」

「あ、え、えっと・・・織斑君の後ろの席、です。」

「わかりました、山田先生。」

自分の提案を否定され、悲しみの表情を浮かべる山田先生を尻目にウオズは一夏の後ろの席に着く。

その後LHRが終わり一夏は後ろにいるウオズに話しかける。

「ウオズ、お前も来たのか。」

「もちろんだ我が魔・・・いいえ、ここは一夏くんと呼ぼう。」

私は貴方をサポートしなければならぬのでね。こうして入学したほうが好都合だ。」

「いやー、安心したよ。男がもう一人いると少し気がラクになる。」

一人だけだと耐えられそうにないと続けると、一人の女子生徒が一夏に話しかける。

「ちよつといいか一夏。」

「お?おおお!」

その人物はどうやら一夏の知り合いのようだった。

「箒じゃん!久しぶり!」

「あ、ああ、少し話がある。屋上にいいか?」

「ウオズ、行つてきていいか?」

「・・・。」

「ウオズ?」

一夏の問いになぜか答ええないウオズ、どうやら箒を見ているようだった。

「・・・時間が無いから早くすませるといい。」

少し間を空けて答えるウオズ。

一夏の知り合い・・・幼馴染みの『篠ノ之箒』と屋上へと場所を移す。

「しかし、久々だな箒。」

「あ、ああそうだな。」

箒は久々にあった幼馴染との距離感が凶れず少し、控え気味の返事をする。

「そういえば剣道の県大会優勝したって？すごいじゃん！」

「な、なぜ知ってる!？」

「そりゃあ新聞に載ってたからな。」

「なぜ新聞をみる！みるな！」

「うん、理不尽。」

箒は自分のことを知っていた一夏に対して顔を赤くする。

「立派になったもんだな。」

「そうだ！もし王様になったら俺の側近にしてあげよう！」

「・・・自己紹介の時もそうだったが、まだその夢は諦めてなかったんだな。」

「当然でしょ！俺は最高最善の王様になるって決めてるんだ！」

「・・・・・・・・まったく、一夏は変わらないな。」

箒は変わらない昔のままの幼馴染の姿に思わず歓喜に浸る。

変わらない、本当にあの頃のままで。

そう思っているとなぜか学園のチャイムが5分早くなり始める。

「あれ？チャイム・・・・・・・・なんか早いな・・・・・・・・まあいいや続きはまた後でな。」

「ああ・・・・・・・・。」

二人は教室に戻り始めると、一つの目線・・・・ウオズが入り口の陰から二人の様子を見ていた。

タブレットが開かれておりそこには『不調でIS学園のチャイムが予定より早く鳴ると』と書かれていた。

チャイムはウオズが意図的に鳴らした物だった。

ウオズはタブレットPCを操作しある資料をみる。

篠ノ之箒・・・・・・・・。

ISの生みの親『篠ノ之束』の妹で織斑一夏の幼な馴染み。

小学生の頃から織斑一夏に好意を抱くも小学4年生の時に『重要人物保護プログラム』によつての各地の学校を転々と転校することを余儀なくされるが、のちにこのIS

学園で再開。

積極的にアプローチをするもその恋が実ることがなかった。

これに書かれていることは未来のこと。

しかし続きに書かれている項目にウオズは眉をひそめる。

彼女の存在は大いに危険だ・・・我が魔王の道を阻む邪悪な障害。

最悪の場合抹殺も視野に入れないといけない。

しかし、彼女の後ろにはあの篠ノ之束がいる・・・彼女の処置は慎重にならなければ。

ウオズは篠ノ之箒に対してかなり警戒をしていた。

「織斑くんここまで分かりますか。」

「んー、微妙。」

「微妙・・・ですか・・・?。」

織斑一夏は最初の授業の内容を理解しようと四苦八苦してた。

「ちゃんと参考書は読んだか?」

「ああ、あの厚い奴? 読んだけど途中で寝ちゃって。」

その答えを聞いた千冬は名簿で一夏の頭を叩く。

「つがあ!!」

「二ヶ月ほど猶予があつたはずだ・・・一週間以内に全部覚えろ。」

「そんなー。」

その様子をウオズは後ろから少し冷たい目で見つめていた。

(我が魔王がなぜ王になれないか分かつた気がするよ。)

ウオズは心の中のため息をする。

「常盤くんはわかりますか?」

「ええ、だいたいは。」

「常盤、後でこのバカに教えてやってくれ。」

「わかりました。」

授業が終わり、ウオズは一夏に対して説教じみたことを言う。

「この数ヶ月間IS学園でなにをしていたのですか・・・我が魔王?」

「だって俺王様になる予定だったし、あんま勉強してないんだよね。」

「失礼ながら言わせてもらおうが・・・魔王なめてんですか?」

「つひ!ごめんなさい!」

「ISは危険な代物であることをお忘れなく・・・まともにISが扱えないようだと魔王

どころの話じゃない。

まったく・・・夜私の部屋に来るといい、I S に関して手取り足取り教えましょう。」

「恩にきるぜウオズ！」

その会話を聞いた他の生徒たちは

(織斑君と常盤君が夜な夜なお勉強会(意味深)だって!?)

(もしかしてあの二人って!!)

(間違えない)

((((できてる)))

と勘違いしていた。

「・・・何か寒気がしたのだが。」

「・・・お、俺も。」

「ちよつと、よろしくつて?」

「ん?君は?」

二人の元に金髪の生徒が訪れる。

「まあ?わたくしをご存じない?」

「一夏君、彼女はセシリア・オルコット…イギリスの代表候補生で名門貴族のお嬢様…

IS学園の試験も首席で合格したようで学内でもそこそこの有名人です。」

「え!? 貴族!?!」

「貴方はご存知のようで安心しました。」

「…ええ、あなたの事はよく知っていますよ。」

「うわー! 貴族なんて初めて見たよ! うわー!」

突如セシリアの全身を舐め回すように観察する一夏。

王を目指す一夏にとって『貴族』というのは代表候補生や首席よりも最も関心を持った情報だった。

「な、なんなんですか?」

突然のことに困惑するセシリア。

その様子にウオズは呆れながらも咳払いをし話を続ける。

「んん!! それで、代表候補生殿が私たちに何かご用で?」

「唯一の男性がどのような感じかと思いましたがね。なにかパツとしませんわね。」

日本の男性も所詮この程度ということですね。」

「なんかすげーデイスられてるんだけど。」

「彼女は男嫌いですが自信家なのです、ご辛抱を。」

「まあ、わたくしは優秀ですから、あなた達のような底辺な人間でもやさしく接してあげます。」

分からないことがあつたら・・・そうですね。

泣いて頭を下げれば教えてさしあげてもよくつてよ?

なにせこの私、セシリア・オルコットは入試で唯一、教官を倒したエリート中のエリート・・・

『神の才能』を持ったこの私が教えて差し上げるのですから。あなた達はこの後懇願することになるでしょう!」

「神の才能って言い出したぞ。大丈夫かいっ。」

「ええ、私も予想以上のことで少し困惑しております。」

さすがのウオズもセシリアの性格に困惑する。

「さあ、神の才能にひれ伏しなさい!!おーほほほほ!」

セシリアは胸を張り高らかに笑い声をあげる。

その様子に一夏や周りの生徒は苦笑いするしかなかった。

「おいおい、よく恥ずかしいこと言えるなこのイギリス人。」

((いや、織斑君も結構恥ずかしいこと言ってたよ。))

将来の夢は王と大々的に言った一夏も人のことは言えないとクラス中の人は誰もが思った。

「いえ、結構。」

私は一人でできますし一夏くんの指導は私が受け持ちます。

どうぞお引き取りを。」

そんなセシリアをウオズは丁重にお断りする。

「なんなんですか？男のくせにその態度！」

この神を拒否するとおっしゃるのですか？」

「おいおいおい、ついに自分のことを神って言っちゃったよ。」

「貴方はまだ候補生止まり、自分を優先した方が良いのでは？」

代表候補生であつて代表ではない。

自分たちに構っている暇は無いのでは？とウオズは言う。

「それもそうですわね・・・また来ますわ。」

ウオズの言うことに納得したセシリアは自分の席に戻るのであった。

「いいのか？」

「・・・彼女もまた危険な存在です。」

「え!?なんでまた・・・ってなんか、わかる気がする。」

「自分を神という輩にまともな奴はいないと一夏は思った。

「それも未来タブレットからの情報?」

ウオズは一夏の問いに頷きタブレットPCを開く。

セシリア・オルコット。

名門貴族オルコット家の跡取りでイギリスの代表候補生。

クラス試合で織斑一夏に惚れ、篠ノ之箒同様アプローチをするが

なぜか振る舞った手料理の中に大量の劇薬が混入、それを食した織斑一夏は生死を彷徨う重体になる。

と、タブレットには書かれていた。

それを見たウオズは少し冷汗を流しながら一夏に告げる。

「このままいくと貴方はセシリア・オルコットによつて殺される可能性があります。」

「えええ!?! なんて!?!」

「キーワードは・・・サンドイッチ。」

「サンドイッチ!!? 何か兵器の隠語か何かか!?!」

「うるさいぞ! 静かにしろ! 授業を始める。」

チャイムがなり二人の会話を入室してきた千冬が一喝で絶たせる。

しかし、ウオズが言ったことがきなり一夏は小声で会話を続ける。

「ど、どうするればいい……。」

「彼女とはあまり関わりを持たないほうがいい。」

「でもよう、彼女が俺を殺すような子とは思えないなあ。」

同じクラスの仲間だし。

その言葉にウオズは密かに眉をひそめるのであった。

(まあいいでしょう。)

セシリア・オルコット：貴女は精々我が魔王の大いなる肥やしになってもらいましょう。(う。)

王を成長させるためだったらなんだったって利用するし手段は選ばない。

ウオズは密かに黒い考えを抱くのであった。

「はい！私は織斑君がいいと思います！」

「え!?!」

突然名前を呼ばれた一夏は驚きの声をあげる。

「聞いてなかったのか馬鹿者。」

「あいた。」

千冬は一夏に再びゲンコツを食らわす。

「今からクラス代表を決める。自薦他薦問わない。」

クラス代表・・・学校行事の会議や、クラスに関する雑務を担当するのが主な内容だが、

クラス対抗の I S バトルに参加することが大きな役割だろう。

クラスの中で一番の実力者がこの役を担ったほうがいいのだが、クラスの女子たちは唯一の男性に花を持たせるべく。

織斑一夏、常盤ウオズを推薦するのであった。

「私も織斑君!!」

「男だから活躍しないと!」

「私は常盤君がいいな!」

「私も私も!」

「織斑と常盤か・・・他には?」

「ちよつと待つてください!」

その推薦に納得がいかないイギリス代表候補生セシリア・オルコットが席を立つ。

「男が代表なんて、とんだ恥さらしですわ!」

この神セシリア・オルコットにそのような屈辱に一年間あじわえつて言うのですか?

だいたい、文化も後進的な島国で暮らさなければならぬこと自体わたくしには耐え難い苦痛でありまして……。」

なぜか日本を罵倒し始めるセシリア。

その抗議の影響で徐々にクラス内の空気が悪くなる。

「これだから日本国はＩＳの技術が進歩せず……。」

「ダメだよオルコットさん！」

それに痺れを切らした一夏は席を立ち

「そんなこと言っちゃダメだよ！」

オルコットさんがクラス代表になりたいのは分かった。

でも代表つていうのはみんなからの信用と信頼がないといけない。」

力強い一夏の瞳がセシリアをじっと見据える。

「ここにいる人 全員仲間だ！仲間を悪くいう奴にクラス代表は任せられない！」

「……！」

「俺、織斑一夏はクラス代表に志願します。」

「……ほう。」

一夏のセリフに関心した千冬は少しだけ微笑み、周りを見る。

「そうか、他にいないか？」

「・・・お待ちを。」

セシリアが手を挙げ、一夏の方を見る。

「確かに貴方の言うとうりです。失言でした…この場で皆様に謝罪します…申し訳有りませんでした。」

クラス全員に向けて頭をさげるセシリア。

「しかしわたくしもイギリス代表候補生としての意地がありますし、それにクラス代表には学年トーナメントがあります。」

強い人が代表にならないことには意味がありません。故ある程度実力がある私がクラス代表になるべきです。」

そして少しだけ深呼吸をして続ける。

「わたくし、セシリア・オルコットもクラス代表に志願致します。」

そして織斑一夏さん・・・貴方に決闘を申し込みます。」

「・・・うん、いいよ。その方はわかりやすい。」

決闘・・・勝った方がクラス代表を務める。

二人に闘志が湧く。

「よし、一週間後、代表を決める試合を行う。織斑、常盤、オルコットはそれぞれ準備をするように。」

「わかりました。」

セシリアは返事をし、席に着こうとするが一夏に呼び止められる。

「オルコットさん。」

「？」

「俺、負けないから。」

一夏は満面の笑みでセシリアに宣言するのであった・・・が。

「[[[:]]」

一夏の笑顔に思わずセシリアを含めたクラスメイト全員が一夏に心を奪われた。

「え・・・ええ、楽しみに・・・しています。」

さすがのセシリアも一夏の顔が見れず顔を真っ赤にしながら席に着く。

その様子を見たウオズは少し関心しながらも頭をかかえる。

流石我が魔王、一瞬で多くの人を魅了するとは…。

しかしその魔性の笑みはあらゆる人を幸福にすると共に

不幸を与え…自分をも滅ぼすことにお気づきを。

「はあく俺勝てるかな。」

放課後、自分が言ったこととはいえ試合に不安を抱く一夏。

「なあ俺勝てると思うウオズ?」

後ろの席にいる未来の僕に相談するも、彼の姿がいつの間にか消えていた。

「あれ? いない?」

周りの生徒に彼の所在を聞いても、知らないと答え不思議に思っているところに山田先生が現れる。

「よかったーまだ残っていてくれて。

はい、こちら新しい寮の鍵です。」

寮の鍵を一夏に渡すも一夏は顔を傾げる。

「え、あれ? 前の部屋と違う?」

「はい、ごめんなさい、部屋数と定員の関係で少し調整が入りました。」

「1025号室・・・ウオズと同じ部屋?」

「いいえ違います、常盤君は一人部屋になります。」

「え？別？」

同じ男同士相部屋なると考えていたが、どうやら違うらしい。

「荷物はすでに移動済みだ．．．それと織斑、お前に特別に専用機が届く。」

山田先生に続いて千冬も教室に現れる。

「専用機？マジっすか？」

専用の I S が渡される．．．。

専用機といえば前にウオズによつて『白式』と呼ばれる未来の I S が体内に吸収されていることを思い出す。

「専用機．．．でも俺．．．」

言葉が詰まる。

いきなり自分が専用機を持っていると言つても事態が混乱するだけだし

出せと言われてもアレ以降反応を見せない．．．どつちにしろ困る状況を作ることには変わりがないため

知らぬ存ぜぬが一番いいだろうと判断し首を振る。

「なんだ？」

「いや、なんでもない。」

「そうか、しかし来るのに時間が掛かるようだ。」

専用機で訓練はできないと思え」

I Sを使った訓練ができないのか……。

訓練に関してはウオズと相談した方がいいなど考えた一夏はとりあえず寮に戻ることにした。

「おーっほほ!!!」

安心しましたわ。訓練機で私に挑みなど虫ケラが神に挑むことと同じこと。これで少しは私を楽しませて

「あ、あのオルコットさん……織斑君はもういませんよ?」
「ええ!?!」

「1025……1025……あ、ここか。」

寮に戻った一夏は新しい部屋の前に来る。

ノックもせずそのまま入室し、前の部屋と比べて室内が広いことに驚きながらも同室の相手を探す。

「シャワールーム?」

シャワールームから音が聞こえる・・・どうやらシャワーを浴びているだろうと判断した一夏はあはれに気づく。

いや、さて、同室がウオズでは無いということは・・・相手は女!?

「同室の者か?すまない、汗をかいていたのでな、先にシャワーを・・・。」

不味い!

シャワールームの扉が開かれ、バスタオルを巻いた女性が現れる。

長い黒髪に、豊かなバスト・・・。

その女性は自分の幼馴染、篠ノ之箒だった。

「ほ・・・箒。」

「・・・・・・・・一夏。」

一瞬ぼかんとした箒だったが事態を把握し反射的に近くにあった竹刀を手にとり、一夏に斬りかかる。

「ちよ!?それはシャレになんないって。」

一夏は後退するも足が纏れその場に倒れこむと、高速で接近する竹刀に思わず目をつむった。

「・・・・・・・・ってあれ?」

しかし竹刀はいつまでたっても一夏に当たることは無かった。

不思議と思いい目を開けると、そこには小さな緑色の塊が竹刀を白刃取りで止めていたのであった。

「ええ!? またロボット!?」

その姿はまさに小型の人形ロボット

『スイカアームズ、あつ小玉!!』

「なに!?!」

小さい見た目とは裏腹に強力な力で竹刀を弾き飛ばすと、倒れた一夏雑にを持ち上げ、1025号室から急いで彼を運び出すのであった。

「な!? まて、逃げるな!」

「つちよちよと、どこに連れて行くの!?!」

二人を無視し、小さなロボットは寮の廊下を走り抜ける。

「え・・・なにやってるの織斑君?」

「わー! 小さなロボットだー!」

「どこいくのー? 織斑君!」

「いや、ちよつと俺もわからない。」

手のひらサイズのロボットに運ばれているというなんともシュールな光景に通り返る生徒は思わず振り返る。

「なんだか恥ずかしくなってきた一夏は一人で歩けるよと、小さなロボット『コダマスイカアームズ』に話しかけると

それを理解したのか足を止め一夏を下ろす。

そして付いて来いと言わんばかりに一夏のズボンの裾を引っ張るのであった。

「おおお、おう。」

コダマスイカアームズについて行くと突き当たりにある部屋に止まる。

「1068号室……ここに入れと？」

コダマスイカアームズが頷くと、ドアをあげ彼を部屋に誘う。

「ご無事ですか、我が魔王。」

その部屋にいたのはウオズだった。

「ウオズ？ そうか……ウオズの部屋だったのか。」

「まったく見張りを付けてよかったよ。」

君はあのままでと篠ノ之箒によって大怪我を負わせるからね。」

「あ、ありがとう……って……今はそんなことはいいや、箒に謝らないと。」

そう言いながら部屋を出ようとするとウオズが止める。

「貴方はとんだお人好しだ。」

本来の歴史であれば、我が魔王は篠ノ之箒の放った竹刀によって全治半年の大怪我を

負うとかいてある。それでも頭をさげると?」

「俺が悪いんだ、当然だろ?」

ケツ口と答える一夏に対してウオズはため息をする。

「・・・まったく。」

忠告します我が魔王。篠ノ之箒は大いに危険な存在です。」

「え?!なんでまた。」

「それは、いざれわかります。」

とりあえず今夜はここにいた方がいい、一晚経てば相手も熱が下がるだろう、明日謝罪をすればいい。」

「・・・ああそうだな、そうしとく。」

「謝罪をする魔王・・・見たくない物だ。」

「悪いことしたらちゃんと言え!それが王様でしょ?」

「魔王はもつとどつしりと構えるべきです。」

そう言いながらウオズはコダマスイカアームズを変形させウオツチ型にすると腕にあるホルダーにつける。

その一連の動作に未来つてすげー、と感心している一夏に対しウオズはあることを提案する。

「丁度いい、約束通り座学をしましょうか我が魔王。」

「つげ……。」

勉強が苦手な王は思いつきり嫌な顔をする。

「げ、ではありません。ちゃんと相手を分析しないと勝てる試合も勝てません。」

「こちらにセシリア・オルコットに関するデータをご用意しました、こちらを使い……。」

「大丈夫だよ！ほら！前だってIS戦で勝てたし。」

「あの時は私がコレで勝たせたのです。貴方の実力ではありません。」

一夏にタブレットPCを見せる。

「え、そうなの!?!」

「今の貴方は未来の高性能なISを持っていてだけで、経験や能力はまるで足りない。」

相手は代表候補生……知識も経験豊富、勝てる要素がないに等しい。」

タブレットPCを開き未来の情報を開き口にする。

「現に本来の未来だったら……貴方はセシリア・オルコットに無様な負け方をします。」

「まじで?」

「ええ、訓練もろくにせず、大口だけ叩いて自分のISの性能や性質を知らないで突っ込んで自滅です。」

「自滅!?!」

「それはもう本当に我が魔王なのかと疑いたくなるような試合内容でした。」

「ええ………」

「試合に勝ちたければ大人しく私の施しを受けるのです。」

「……はあ。」

そんな負け方はしたく無いと。

観念したように一夏は両手を挙げ、備え付けの机に座る。

「……うん、わかった。オルコットさんにああ言っただ。ちゃんと実力をつけな
いと。」

「その粹です。」

「しかし、ウオズって I S 使えるの?」

「ええ、勿論…… I S では無いが専用機に当たるものは一応持っています。これは未来の
物……今は使うことはないでしょう。」

そう言いながらウオズはコダマスイカアームズとは同じホルダーに付けてあるもう
一つのウオツチ……

『ウオズミライドウオツチ』を見ながら答えるのであった。

「なんですって・・・専用機の件をなかった事に？　どういう事ですか!!」

同時刻、自主訓練を終えた2年のイギリス代表候補生『レティー・テイラー』は誰もい無い更衣室で

電話の相手に怒号を浴びせるのであった。

「代表候補を外す？　不正？　なに意味わからない事言っているんですか!!　不正なんてしてません!!」

・・・私は努力してわざわざ日本に、IS学園に来たのですよ！　急に外すって言われても困ります。」

「セシリア・オルコット？　一年ぼつちの子を優先すると？　ふざけないでください！　私はあの子より優秀です！」

名門貴族がなんなんですか・・・私は自分の実力でここまで・・・ってもしもし？　レティーは抗議を続けようとするが、電話は一方的に切られてしまう。

「せつかくの思い出掴んだ代表候補なのに、こんなので・・・なんなのよ!!」

彼女は端末を思いっきり壁に向かって投げると、ベンチに頭を抱えて座る。

しかし、端末の落下音がしないと違和感を覚え、少し顔をあげると投げたはずの端末

が宙に静止していたのだ。

そう、まるで時間が止まったかのように……。

「え!? な・・なに!」

『お困りのようだね。』

後ろから少女の声が聞こえる。

「誰!」

振り向くとそこにはフードを被った少女が立っていた。

I S 学園の制服は着ておらず、その代わり大小様々なハトメがついた桜色の服を着ていた。

『私はタイムジャッカー……私と契約したらいいもの上げるよ?』

「タイムジャッカー?」

聞きなれない組織名で警戒するレティーだったが少女は気にせずに話を続ける。

『君は専用機を貰えないでいたよね?……このまま行くと貴方は世界大会にでる夢を叶えられずに』

I S 学園でなーんの成果も上げられ無くて、祖国に帰っても実家ですまらなーい生活を過ごして残りの人生を

費やすたーいくつな人生が待っているよ?

でもね安心してね。

私と契約してくれたら私が君に専用機を上げよう。

それもちよー高性能なちよーすごいISを。』

「貴方は・・・いったい。」

レティーは思わず後ろに一步下がる、しかし少女は逃がさないよ　と距離を一気に詰めるものを取り出す。

『まあ、勝手に契約しちゃうけどね。』

手に持っていた黒いウオッチをレティーの腹部に押し付けると、レティーの何かを吸収しその形を変える。

『さあ、ウオズ。君はどうするのかな?』

変色したウオッチのリユーズを押すと禍々しい音声が発せられる。

『・・・ブルーティアーズ!』

第三話 超越 前編

「あの・・・箒、昨日はごめん。」

早朝、1025号室前・・・一夏は箒に頭を下げていた。

「・・・・・・・・。」

「飯、おごるから許して！このとうり！」

手を合わせ懇願する一夏。

あまりの低姿勢に少し呆れる箒だったが一晩で怒りの熱もある程度下がり

取り敢えず一夏許すことにした。

「はあ・・・わかった許そう。」

「ありがとう！箒。」

笑顔で喜ぶ一夏を前に若干ドキつとする箒。

その後一夏の誘いで朝食をとるため食堂へ向かった。

「昨日はどこに居たんだけ？」

「ウオズの部屋。試合に向けていろいろ勉強してた、おかげで寝不足だよ。」

ウオズの熱血指導によって睡眠時間を減らされ、寝不足の一夏はあくびしながら答え

る。

箒は前から気になっていたことを質問する。

「あの、一夏・・・剣道は続けているのか？」

「剣道？あー、やめたよ。」

あつけらかんと答えいる一夏に対し箒は信じられないと言わんばかりに声を荒げる。

「やめた!?何故だ!？」

「なぜって、家のことがあつたしね、時間がなくなつた。」

王を目指す一夏もさすがに家庭のことを考える。

姉と二人暮しのため、バイトをしながら家事をしており剣道をやる時間がなかつたのだ。

「・・・そんな。」

剣道は箒にとって一夏との唯一の繋がり。

理由を知らない箒は、まるで一方的に繋がりを断ち切られたような感覚になり

頭に血がのぼる。

「鍛え直す。」

「え？」

「鍛え直す！付いてこい!!」

箒は一夏の腕を強引に引っ張る。

「え、つちよ！朝食は!!」

「後ででいい!!」

「いやいや、時間がないよ!!」

強引に剣道場に連れてこられた一夏はしぶしぶ防具を着て、箒と試合をする。

結果は当然箒の勝ち。

「いっつー」

「なぜ、そこまで弱くなっている!!」

「いやいやだって！ブランクがある人と県大会優勝者じゃあ普通こうなるだろ！」

「一夏はISを学ぶ前にまずは剣道を……」

ISを学ぶ前に剣道を鍛えなすべき と箒は続け、試合をもう一本やろと竹刀を構えるが

ある男によつてそれは阻止される。

「そこまでにしてもらおうか、篠ノ之箒。」

道場の入り口にウオズが現れる。

「ウオズ……」

「食堂にいないと思つたら、こんなところに……ほら、おにぎりを作つといた。」

一時限が始める前に食べるといい。」

ウオズは手に持っていた包みを一夏に投げ渡す。

「ありがとうウオズ!!」

「貴様は・・・お前には関係ない、これは一夏と私の問題だ。」

「剣術だけ習ってもI Sが操縦ができれば無意味。どちらを優先するかは明白だ。

それに君は一夏君を強くすることはできない・・・むしろその成長を妨げる。」

「なんだと? どういうことだ!!」

「おっと、少し言いすぎた、すまない忘れてくれ。」

でも一夏くんは連れて行くよ、君も授業に遅れないように。」

「おい! 待て!」

無視して一夏を連れ出すウオズ。

それを止めようと箒は手元に持っていた竹刀を構えて

ウオズに向かっていく。

「止まれ!!」

大きく振りかぶりウオズを殴ろうとした瞬間

ウオズはとつさに振り向きマフラーを蛇の様に操り始め箒の竹刀を止める。

そしてそのまま竹刀投げ飛ばし流れる様に彼女の体にマフラー巻きつけ拘束する。

「な!？」

「つみ……未来のマフラーってすっげー。」

一夏が感心しているとウオズは物凄い剣幕で箒を睨みつける。

「生身の人間に対して竹刀を振りかざす……それが武道だと?」

「あ……す、すま……!。」

「では失礼。」

箒も流石に自分に非があると気づき、謝ろうとするが

ウオズは箒の言葉を最後まで聞かずにマフラーを解いて道場を後にする。

「す、すまん箒!また後でな。」

一夏もウオズ跡を追いかける。

「ウオ……ウオズ。箒も悪気があつた分けじやあ……」

「本来の歴史だと、貴方は篠ノ之箒に何度も殺されかけることになるだろう。」

「!？」

未来タブレットの情報は確か。

篠ノ之箒は暴力的な女性であり、織斑一夏を殺害する可能性が高い人物の一人……ウオズもセシリア以上に強く警告する。

「あれでお分かりになられたでしょう？」

彼女は強情だ・・・気に食わないことがあれば暴力で訴える、そういう女だ。

我が魔王が死ぬ未来がある以上、例えば幼馴染であろうと彼女に近づくのは避けてほしい。」

「箒はそんな奴じゃない!!」

一夏は珍しく声を上げる。

「箒は俺の大切な友達だ！友達が友達がを殺すわけ無いだろ！」

一夏の甘い考えに苛立ちを覚えるウオズ。

幼馴染に殺される未来があろうと一夏は決して信じない男だった。

「…そうだと私も心から願いたいよ。彼女を敵に回したくないしね。」

妹を激愛している天災『篠ノ之束』・・・

彼女が何か行動を起こせばウオズでも止めることは難しい。

故に箒の対象は難しい上に自分の思い通りに動いてくれない一夏に頭を悩ます。

「とにかく、私以外の人物からの施しを受けないように。」

王に至る未来を望むなら・・・それが賢明だ。」

従わないと王になれない：

すこし脅しみたいない言い回しをするウオズ。

「……………」

一夏もそれを察して苦い表情をする。

「とりあえず、少し付いてきてくれ…見せたいものがある。」

「？」

場所を移しISの格納庫の片隅。

そこに一機のISが格納されていた。

「これって……………」

訓練機ではない見慣れないISに一夏は疑問を抱く。

「これは、この時代の『白式』です。」

「でも、千冬姉が遅れるって……………」

「本来の歴史ならばね…これを使った」

ウオズはタブレットを見せると一夏は納得する。

「でも、なんだか形状が違うね。」

機体色は白というより灰色、形状もシンプルで記憶の中の白式とかなり違いがあった。

「それはそうです、フォーマットもファーストシフトもしていませんから。さあ我が魔王…白式に触れてください。」

「?」

疑問を持ちながら言われた通り白式に触れると一夏の体内から

電気とノイズを走らせた『白式ミライドウオッチ』が現れ、それと共鳴するかのよう
に白式自体も電気とノイズを走らせる。

そして互いに細かい光の粒子となり一夏の右手に集結、新たな『白式ミライドウオッチ』が生成される。

「か、過去と未来の白式が一つに。」

「これで白式が統合されました。」

「こちらを。」

ウオズは自分も腕に嵌めている同型機で色違いの

『白いライドウオッチホルダー』を一夏に渡す。

一夏はそれを左腕に付け『白式ミライドウオッチ』を装着する。

「これうまく展開出来るはずです。」

「分かった……いい白式!」

左腕の前に突き刺しながら白式の名を叫ぶと純白のISが展開される。

誘拐事件で展開した白式と同じものだ。

「おお、ちゃんと出た!」

「『白式・雪羅』か…」

しかしウオズは展開された白式をみてどこか納得していない表情を見せる。

「え？なんか問題？」

「雪羅は本来この時間軸上での形態であって

私の世界の時間軸・『未来の白式』本来の形態ではないのです。

この時代に合わせたるため一時形状を退化・いや、形態を置き換えていると言った方がいいのか…魔王としての力が覚醒すれば本来の姿に戻るだろう…。」

今一夏が展開している『白式・雪羅』はウオズが未来から持ってきた『未来の白式』とは別物だった。

ウオズが一夏に授かった『未来の白式』はウオズの世界『魔王イチカ』が存在する時間軸の物であり

『織斑一夏が死亡する』時間軸の物ではない…つまりそこで矛盾が生じ、次元レベルの修正によって『未来の白式』は『織斑一夏が死亡する』時間軸での未来の形状『白式・雪羅』の形を取ることによって矛盾をなくしているということだ。

「なんかややこしいな…どういう事？」

しかし一夏はこの内容を理解できず顔を傾ける。

「未来の白式はこの時代の白式ではないということだ。」

「ますますわからなくなってきたぞ?」

「……まあ、良いでしょう。これからは訓練は白式を使つて行います。

第1アリーナ使用許可を取つてあるので放課後そちらで訓練をしましょう。」

ウオズ説明を諦めた。

一週間後、クラス代表を決める試合が第一アリーナで行われた。

一組の生徒の他、人類初の男性IS操縦士である織斑一夏がどのような戦いをするのか興味をもった別クラスの生徒も複数人見学に着ていた。

一夏は待機室で体をほぐしながら相手の準備が終わるまで待機をしており、その場に何故かウオズの姿はなく、代わりにいた篠ノ之箒と会話を始める。

「箒?こんなところで何をしてるんだ?」

「あ、いや……その、心配になつて。」

この一週間一夏は箒の部屋ではなく、ウオズ部屋で寝泊りをしていた。

箒自身は戻つてきてほしいと考えているが、試合に向けた訓練で忙しそうにしていたために、なかなか話を切り出せないでいたのだ。

「大丈夫、ウオズとめっちゃ訓練したから自信ある。」

ウオズの名前を聞き若干体をビクつかせる箒。

暴行の一件で自分の印象を悪くしたのではないかと恐れを抱いていたのだ。

「そ、そうか……ならいいんだ。」

「箒。」

一夏は箒の目を見る。

「今度、また剣道教えてくれよな?」

友人や仲間を大切にしている一夏は箒の不安を感じ取って

自分は気にしていないよと笑顔で箒に語る。

「あ、ああ!いつでも来い!」

『織斑君準備はいいですか?』

待機室内に山田先生の声がスピーカーから流れる。

「はい!いつでもいけます!」

『ではカタパルトについて下さい。』

一夏は白式を展開しカタパルトに脚部をはめる。

「じゃあ、言ってくるよ箒。」

「ああ、勝手こい!」

「織斑一夏、白式・雪羅 いきます!」

カタパルトが勢い良く射出され白式はアリーナのスタジアムに飛び出す。

飛行訓練はある程度積んでおり、難なく飛行する白式。

その様子をアリーナの管制室から見ていた山田先生と千冬は安心した表情を見せるがあることに

気がつき表情を変える。

「あれ？カタログデータと違う武装していますね。」

「そうだな、機体性能もだいぶ誤差がある。」

それもそのはず、すでにセカンドシフトしている状態であるため

資料と大幅に違いがあるには当然の事だった。

「なにか改良をしたのですかね？」

「……」

千冬は顎に手を当て鋭い眼差しでモニターに移る一夏もとい白式を見る。

「束の作業？……いや、違うか？」

「来ましたわね。負ける覚悟はよろしくって？」

先に着ていたセシリアが、一夏に挑発をする。

「負ける気はねー。いい試合にしようぜ？オルコットさん！」

一夏の笑顔で若干、ドキッとさせるセシリアだったが、試合開始のアラームですぐに冷

静になる。

「さあ！ 踊りなさい、セシリアオルコットとこのブルーティアーズが奏でるワルツで
!!」

「うおおおお!!」

試合は互角。

その状況を見て感心する山田先生。

「すごいですね織斑君・・・代表候補生と互角なんて。」

「・・・・・・・・」

「織斑先生？」

「ん？なんだ山田先生？」

「あ、いえ。何か考え事でも？」

「ああ、少し違和感を感じてな・・・」

千冬はモニターを見る。

「違和感ですか？」

「一夏はIS初心者だ、そんな奴が代表候補生相手に互角などおかしな話だ。」

例え I S のことはある程度知ってても稼働時間は代表候補生と比べて明らかに少ない、素人

それなのに一夏はその代表候補生とほぼ互角の実力を所持していた。

「あー、でも常盤君と時間ギリギリまで訓練していたようだし、そこで何かコツとか掴んだのでは？」

山田先生はその原因は常盤ウオズではないかと答える。

「常盤と？」

「ええ、なにやら熱心に教えていました。青春ですなー。」

(常盤ウオズ・・・貴様はいったい何者だ。)

常盤ウオズ「突然現れた二人目の I S 適性者。

彼のことはよく知らないが一夏の知り合いの様だった。

一夏をここまで鍛え上げるには I S の知識とある程度の実力が必要不可欠

女性ならともかく I S に触れる事の少ない男性であるウオズがどこでそんな知識と経験得たのか

もしかすると何処かのスパイ？しかし一夏を鍛えてなんのメリットがあるのだろうか・・・。

千冬はウオズに対し疑惑を持つ様になる。

一方、ウオズ本人は他の生徒とから離れ、通常立ち入り禁止場所になっている来訪者の席に腰掛け一人試合を見ていた。

(さすが・・・飲み込みが早い。)

が、我が魔王だったら手をかぎすだけで瞬殺だ。)

我が魔王：

ウオズは未来の一夏：魔王イチカの事を思い浮かべる。

大勢のIS軍隊をたった一人で壊滅に追い込んだ最低最悪の魔王。

その力の断片はこの試合をしても現れることはなかった。

顔を上げ、雲一つない青空を眺める。

「逢魔の日はまだ先か・・・。」

「な、なかなかやりますわね・・・予想以上です！」

試合は意外にもセシリアの劣勢で進んでいた。

素人同然と思っていた織斑一夏の実力は自分の予想より遥かに上回っており

レーザー射撃を雪片で切り裂いて相殺する荒技、BT兵器による死角からのオールレンジ攻撃をいとも容易く避ける反射神経とセンス

たった一週間でこのようなレベルまで力をつけた一夏のポテンシャルと努力を素直に評価すると同時に自分の勝利のビジョンが見えなくなること、セシリアは焦りを感ずる。

そしてついにBT兵器の一基が破壊されてしまう。

「な、BTを!?!」

それから連鎖するように次々とBT兵器を荷電粒子砲や雪片によって落とす、残りは切り札である2基だけになってしまう。

「これでどうだ!!」

イグニッション・ブースト

「瞬時加速!?!」

一夏はイグニッションブーストを使い一気にセシリアとの間を詰め

雪羅を構える。

「掛かりましたわね! BTは二基残ってましてよ。」

残りの二基に装填されているミサイルを一斉に打ち出し、一夏に命中させ勝利を確信したセシリアは、笑みを浮かべるがそれはすぐに焦りへと戻る。

一夏は落とされていなかった。

雪羅のシールドによってミサイルを防いだのだ。

「知ってたよ!」

スターライトmkIIIを雪羅の爪で掴みゼロ距離荷電粒子号で破壊。

そしてそのまま流れるように零落白夜を発動させた雪片でセシリアを斬りつける。

「インターセプター!」

セシリアはショットブレードで受け止めるも一夏は分かっていたように口角上げる。

「零落白夜は剣だけじゃ無いんだぜ?」

「な!?!」

一夏は何と雪片を手放す。

あっけに取られたセシリアに向けて零落白夜を発動させた雪羅の爪でブルーティアーズのシールドバリアーを思いつき切り裂さいた。

「きゃあああああ!!」

そしてそのままドメとして荷電粒子砲を打ち出しブルーティアーズのSEをゼロにする。

『勝者、織斑一夏』

「よっしゃ!。」

勝負は一夏の圧勝。

まさかの展開に会場は静まり返る。

それもそのはず、殆どの生徒が一夏の敗北を予想していたのだ。

男は女より弱い：女尊男卑が当たりな世界で、誰しもが当たり前の感覚で男一夏が負けるものだと思っていた

結果は皆の予想を裏切る形に終わった。

「ま…まさか勝ってしまうなんて。姉として鼻が高いんじゃないですか？」
「…そうだな。」

まさかの一夏の勝利に管制室にいる教師二人も驚愕の表情をする。

「よし！今度はウオズに頼らなくて勝ったぞ！」

「…まさか神たるわたくしが負けるとは。」

ISは解除され、そのままアリーナに座り込むセシリア

その様子を心配したのか一夏が近寄る。

「大丈夫オルコットさん？少しやりすぎたかな？」

「笑に來たいのですか？神だ神だと言っていた癖に無様に負けた

セシリア・オルゴット（笑）を笑いに來たのですね！」

「いや、別にそんな事思っていないよ。」

何だよセシリア・オルゴットって…語呂いいな。」

セシリアは男というものは皆、父のようへこへこ頭を下げる弱い人間だと思っていた。

しかし、その考え方は一夏との戦いで改めるのではあったが、強い悔しさと惨めさを
感じ

一夏の差し伸べられた手を拒む。

「いや、ただ俺はセシリアを心配で…」

「嫌味にしか聞こえませんか！」

砂埃を払い、一夏に背を向けピットに戻るセシリア。

一夏はその後ろ姿をただただ見つめることしかできなかった。

「なんか、怒られちゃったな…。」

自分も戻ろうとしたその時。

「セシリア・オルゴット。」

セシリアの前に一人の生徒が立ちはだかった。

「貴女は確か二年のレティ・テイラー先輩…どうしてここへ？」

「知り合いか？」

一夏も気になり、セシリアの元へ行く。

「ええ、同じイギリスの代表候補生です。」

代表候補生……その言葉を聞いてレティーの中で何かが切れた。

「お前を殺してやる!!」

『ブルーティアーズ』

レティーは禍々しいオーラとともに青いIS型の怪人へと姿を変える。

そしてそのままレーザーライフルを展開し、生身のセシリア向かってそれを射撃をする。

「!!」

「きゃあ!？」

しかし、その攻撃は割って入った一夏の斬撃によって無力化される。

「お前！生身の人間に向かってなにやってんだ!!」

『黙れ!!そこをどけええええ!!』

背部から鳥の羽のようなパーツが4基射出され、それぞれ一夏に向けてレーザー攻撃をする。

「つく!!これは?!」

「BT兵器!？」

そう、それはまさしくブルー・ティアーズと同じBT兵器。

「ごめん！オルコットさん！」

「お、織斑さん!？」

流石に全方位攻撃からセシリアを守れないと判断した一夏のはセシリアをお姫様抱っこのように抱き上げ、ピットに向かって飛び立つ。

しかし、それをさせないとばかりに謎のISは攻撃を続ける。

「つち!？」

避けながらもなんとかピットに向かうが、ピットの入り口は頑丈なシエルターで閉ざされていた。

「な!？」

「織斑！織斑！一夏!！」

「連絡つながりません!・・・システムが何者かによってロックされています。」

管制室にいる教師二人は謎の敵に対し一夏とセシリアに撤退命令を出そうとするが通信の不具合や

謎のシステムのロックによって対応できずにいた。

「なんだと!?! いったい彼女は何者だ?」

「2年のイギリスの代表候補生ですど．．．まさ何処かのスパイ? 織斑君を狙って!」

「いいや、彼女は明らかにオルコットを狙っている．．．取り敢えず生徒たちに避難指示後を。」

アリーナ内の警報を鳴らし生徒たちに避難指示を出す。

アリーナにいる生徒が急いで避難している中、流れに逆らう様にウオズは一夏が良く見える通常のアリーナ席に移動する。

「あれはアナザーISS!?! どうしてこの時代に．．．まさか。」

ウオズは謎のISSに対し驚きの表情を見せるが、それを創り出した人物に心当たりがあつた。

『そっくだよー。』

少女の声と共に周りの風景が静止する。

やはりかという表情を浮かべたウオズは声の方向を向く。

そこにはレティーに強引に契約を結んだフードを深く被ったタイムジャッカーの少女がいた。

「タイムジャッカー『リアス』。」

ウオズは静かに少女の名前を口にする。

『久しぶりだねーウオズ…元気にしてたー?』

「やはりお前の仕業か。」

歴史が変わった原因…それはタイムジャッカーの介入に原因があるのではないかと

ウオズは睨んでいた。

「目的は何だ?」

『知ってるでしょ?…織斑一夏の抹殺と新たな王の創造。』

「今時間軸で起きている歪み…それも君の仕業か?」

『あーあれね。』

リアスは少し考えると笑顔で答える。

『そうだよー…と言ったら?』

「始末する。」

ウオズは腕のホルダーから『ウオズミライドウォッチ』を取り出しリユーズを押す。

『ウオズ!』

そして腰回りに現れたドライバーに装填しようとするが

リアスは慌てた表情でそれを止める。

『嘘だよ！冗談だつて！ウオズを押搦っただけ。』

時間の歪みだか何だか知らないけど、私は一切関係ありません！。」

「なんだと？」

嘘か誠かそれは彼女のみぞ知る・・・そう言われてハイそうですかと信じるウオズではない。

「どつちにしろお前は始末する運命だ。」

『おつかねー、逃げろー！』

リアスは全速力で入り口まで走り出す。

それを追いかけたウオズだったが、曲がり角でリアスの姿を見失う。

「逃したか。」

ウオズミライドウオツチをホルダーに戻し別のウオツチ

銀色のウオツチ：『ファイズフォンX』と入れ替え一夏にプライベートチャンネルで

通話をかける。

通信妨害を受けている状況ではあるがファイズフォンXは過去と未来に通話が可能、妨害程度で通話不能にはならない。

「聞こえますか？我が魔王」

『ウオズか？丁度良かった！千冬姉に連絡つかなくて困ってたんだ。』

「こいつは一体何か知ってるんだろ？」

「ええ、それはアナザーISS。」

『アナザーISS？』

「詳しい説明は詳しい省きますが、アナザーISSはISSであってISSではない物：機械というよりは怪人に近い存在です。」

『こいつらも未来人か何かか？』

「少し違う、未来の技術で生まれたのは確かだが中身はこの時代の人間だ。恐らく今は暴走して理性を失っているのだろう。」

『だったらどうにかして止めないと！』

「しかしアナザーISSは元となったISSでしか倒せない。」

『元となったISS？』

アナザーISSについては謎が多いが、現段階で分かっていることはアナザーISSは元となったISSで倒すことが可能

しかし、逆に言うとそれ以外のISSもしくはそれ以外の兵器の攻撃を一切受け付けないのだ。

「そう、恐らくそのアナザーISはブルー・ティアーズだ。」

『オルコットさん専用機か!』

一夏はセシリアならアナザーISを倒せると思いセシリアを見る。

「オルコットさん!ブルー・ティアーズって起動できる?」

「い、いいえ。先ほどの試合でSEがつかまりました。」

そう言いながらイヤリングの形状をしているブルーティアーズの待機状態に触れようとするが。

「あ、あら!?ブルー・ティアーズがない!」

「なんだって!」

解除したら自動的に待機状態になるはずのISが彼女の手元になかったのだ。

『やはりか。』

アナザー・ブルー・ティアーズは歴史から外れ他者に渡ったブルー・ティアーズ:アナザー・ブルー・ティアーズこそがこの時代のブルー・ティアーズそのものだ。』

まるで早口言葉かラップみたいな台詞に若干苦笑いする一夏。

「なんかすげーややこしいけど、いわゆるブルー・ティアーズが奪われて使えないってことか?」

『そう解釈して良い。』

「だったらどうすれば?！」

『それは・・・』

「その女をよこせ!!！」

ウオズに倒し方を聞こうにもアナザーBTの攻撃に遭い通話を中断する。

BT兵器を回避しながら一夏は自分にできることを考える。

「コイツ! オルコットさんを的確に狙ってきやがる!」

攻撃は読める。

明らかにセシリアを狙った射撃。

避けることは安易だが、生身のセシリアを抱えた状態では動きが制限されてしまう。

「一夏さん…私を置いて逃げてください。」

明らかに自分が足を引張っていると感じたセシリアが一夏に言う。

「馬鹿! そんな事出来るかよ!!」

そんなセシリアに一夏は強い眼差しで答える。

「仲間を見捨てる奴なんて王様になんかなれない!!」

セシリア・オルコットは俺の仲間だ絶対に守る!!」

「一夏さん。」

「なんて熱くてお優しい方・・・今までそのような男性と出会ったことはありません

でした。

セシリアの胸の鼓動がだんだん早くなる。

(この感覚・・・間違いありません。わたくしは織斑一夏さんに恋をしてしまいました。)

その瞬間一夏の纏う白式に変化が現れる。

ノイズが走る。

そのノイズが段々と大きくなり、白式が古いテレビ映像の様に荒く強くブレていく。

「な、なんだ!？」

驚く一夏をよそに、ブレは銀色の光を放ちながら白式のシルエットを変えていく。

「セカンドシフト!？」

「いや、違う・・・なんだ?」

「おお・・・遂に覚醒を!」

千冬と山田先生は自分の知識にない現象に困惑し

ウオズはこの現象を待ちわびてた様に歓喜する。

「間違いない・・・その雄姿・・・正しく魔王の力!!」

光が収まり白式の新たな姿が明らかになる。

機体色は白と白銀・・・

頭部は顔全体を隠すフルフェイスに変化し、ダイヤルの装飾と新たに加わった

V字アンテナは時計の針の様に10時10分をさす…

背部のギアモチーフのカスタムウイングが合わさりその姿は正しく『白銀の時計台』時を統べる、ISの王『白式・超越^{ビヨンド}』がここに降臨^{ビヨンド}する。

「祝え！全ISの力を受け継ぎ、過去と未来を知ろしめす王者の羽衣。

その名も『白式・超越^{ビヨンド}』今まさに時の王者が現代に降臨した瞬間である。」

第四話 超越 後編

ウオズはスタジアム中央に現れ、声高らかに白式を祝福した。

「うお、ウオズ!!」

いつの間にそんなところに・・・てか、危ねえぞ!!」

「と、常盤さん!?!」

しかし場所はアナザーBTの攻撃が飛び交う非常に危険な場所

そこにISを纏わずに現れたウオズに驚く一夏とセシリア。

「私の事はいい、だが残念なことにそのままの状態ではアナザーISには勝てない。」

マゼンタカラー：見方によってはISという文字に見えなくも無い形のバイザーが

アナザーBブルー・テイアースTを見る。

「じゃあどうやって!!」

未来の情報から攻略法を探すためタブレット開くが、そこに書かれていた内容が大きく変化していた。

ウオズは少し驚くが原因を直ぐに理解する。

ー未来が変わったのだ。

それもセシリア・オルコットに関する未来……。

ウオズはすぐさま情報読み取り、アナザーIISの攻略法の見出す。

(なるほど、これはセシリア・オルコットとの絆を深めた場合の歴史……だつたらその歴史を利用してもらおう。)

ウオズは懐から黒いウオッチ：『ブランクミライドウオッチ』を取り出すとタブレットに文章を記入する。

『ブルー・ティアーズミライドウオッチが生まれた』

すると黒いブランクミライドウオッチが輝き始め青と白のウオッチに生まれ変わる。

「我が魔王……こちらを！」

ウオッチを空中にいる一夏に向けて投げ、一夏はアナザーBTの攻撃を避けながら片手でそれをキャッチする。

「うお!?なんだこれ」

『ブルーティアーズミライドウオッチ』……

『白式・超越^{ビヨンド}』本来の力を引き出すモノです。

さあ、それを腰に巻いているドライバーに！」

「ドライバー？」

腰部分を触れると、そこには今までになかった白い装置が付いていた。

「これか！」

セシリアをウオズの側に下ろし、

アナザーBTと向かい合いながらウオッチのリユーズを押しす。

『ブルーティアーズ！』

そしてドライバーの窪みに装填し、もう一度リユーズを押しす。

『アクション！』

軽快な待機音楽とともに背後から白い時計台のビジョンが現れ、そのままドライバーのレバーを押し込む。

『投影！フューチャータイム！』

蒼い光が全身を包み白式に新たな装甲と武装を形成する。

『狙い撃ち！蒼雫…フューチャーリングブルーティアーズ！』

ティアーズ！』

装甲がない部分を補う様に、新たに蒼い装甲が展開され全身装甲使用のISへと変化。

バイザーのISの文字はクリアグリーンに変色し、胸装甲には大きく『BLUE・T EARS』の文字。

カスタムウイングのギアが変形し新たな武装…六基のBT兵器が装備され、その姿は

まるで

セシリアのIS『ブルーティアーズ』を『白式』が投影したかの様になっていた。

「うおおおおお!!?何これ!!」

「まさか…ブルーティアーズですの!?!」

白式の変化に驚く二人

それを他所にウイズは手を広げ再び祝福する。

「祝え!全ISの力を受け継ぎ過去と未来を知ろしめす王者の羽衣。」

その名も『白式・フューチャーリング 蒼 雫』ブルーティアーズ今まさにISの力を継承した瞬間である。」

「あ、またやるんだそれ。」

でも…なんだか行けそうな気がする!!」

『ジカンギレード!ジュウ!』

雪羅の代わりに出現した新たな武器、字換エネルギー銃剣『ジカンギレード』を展開しながらカスタムウイングから生成されたBT兵器を

アナザーBTに向けて打ち出す。

「行け!ブルーティアーズ!!」

BT兵器を一度も扱ったことが無い一夏だが、白式・超越の固有能力

『フーチャリング』の効果によってミライドウオツチから自動的にBT兵器の運用方法が一夏の脳内にインストールされる。

『ブルーティアーズ！』

相手も負けじとBT兵器打ち出し、互いにオールレンジ攻撃の打ち合いになるが、一夏の方が実力が上、相手のBT兵器は全て破壊されてしまう。

「!?」

「さあ、トドメです。もう一度レバーを！」

「分かった！」

ウオズの指示に従いレバーを引きもう一度押し込む

『ビヨンドザタイム！タイムストームレイザー!!』

ウオツチに内包されたエネルギーが解放され、出力の上だったBT兵器が一夏背後に円を描くように整列する。

『いっけええええ!!』

BT兵器は高速回転しながらレーザーを一斉掃射し、アナザーBTも負けじとレーザーライフルを放つが出力が上がった白式のレーザーを相殺し切れずにそのままレーザー攻撃を受けてしまう。

「あがぁ!!」

まともにも食らったアナザーBTは爆発を起こしながらスタジアムに墜落し、姿を元の人の状態に戻す。

元に戻ったレティーの体内からアナザーウォッチが勢い良く飛び出し、壊れるように消滅

レティー自身は暴走による疲労とダメージによってその場に倒れそのまま気絶する。

「ふう……」

一夏は安全を確認すると、ミライドウォッチをドライバーから外しISを解除、少し深呼吸しながらセシリアの方を見る。

「オルコットさん大丈夫!？」

駆け足でセシリアの元に行き、座り込んでいる彼女にそつと手を差し伸べる。

セシリアは軽く返事をしながら差し出した一夏の手を両手で包む。

「え……」

「セシリアとお呼びください。」

「え!？」

そして、そのまま立ち上がるのと同時に一夏に抱きつき、頬に軽く口づけをする。

「ちよ、ちよつとーなに!？」

当然のことにビックリした一夏はセシリアから慌てて距離を離す。

「わたくしあなたを気に入りました．．．絶対にわたくしの虜にしていずれ信者にして差上げますわ！」

「お、おう。」

突然何を言い出すのかと一夏は戸惑いを見せる。

その様子を半ば呆れながら見ていたウオズはそのままスタジアムを後にする。

「はあ．．．結局セシリア・オルコットを落としてしまわれましたか我が魔王。

流石の私も『運命』を変える事は出来なかったか。

まあそれで一つ目のミライドウオツチが生成できたのですから、良しとしましょう。」

歴史は確実に変化している。

織斑一夏が魔王に至る道はまだ完全には閉ざされていないのは確かだが、死亡する未来は変わらずにいる。

それに加えタイムジャッカー『リアス』彼女の存在．．．一夏死亡に何らかの関係がある事には違いは無いが、いったい何のために？

新たな王の創造とは一体。

警戒心は強まるばかりであった。

ウオズはそんな事を考えながらアリーナを出ようとすると、入り口を封鎖するように織斑千冬のが立っていた。

「さて、常盤。話がある。」

「これはこれは、織斑先生…私に（ご）用で？」

「常盤…なにか知っているだろ？」

刃物のような鋭い視線…流石のウオズも人類最強の前では手出しは出来ない。

「なにか、とは？」

「とぼけても無駄だ。あの謎のI Sと白式について、なにか知っているだろうか？」
流石にあれだけ動けば彼女に気づかれる。

しかし、それはウオズにとって想定内であった。

「貴女なら…話してもいいかもしれませんね。」

ウオズは千冬に自分が未来人であること、一夏の未来、白式、そして謎のI Sについて一夏に言ったことと同じ内容を話した。

「そんな話、信じるんでも？」

しかし当然ながら千冬は疑いの目をウオズに向ける。

「いいえ、貴女は信じます。

．．．．．そうですね、ここで未来人らしく予言をしましょう。」

「ほう？」

「予言が当たつたら、私の言うことを信じて頂きたい。」

「．．．．．いいだろう。」

千冬は少し考えそれを承諾する。

ウオズはタブレットを開き未来で起こるであろう出来事を

千冬に伝え、そのまま静かにタブレットを閉じる。

「ほう、それは大層な予言だな。」

「答え合わせはまたいずれ。」

ウオズは千冬にお辞儀をし歩き出す、そしてすれ違いざまに小声で千冬に耳打ちをする。

「では、また明日お会いしましょう織斑先生．．．いえ、白騎士殿。」

白騎士．．．。

その単語を聞いた瞬間、珍しく冷や汗を流しながら目を見開く千冬。

「っ！お前!？」

千冬はとっさに振り向くが、ウオズの姿は既に消えていた。

「まさか……本当に。」

「一夏君、この状況は一体？」

事件から数日たった日の昼休み。

ウオズは一夏に誘われ、一緒に昼食を取ろうと屋上に来たのはいいものの、その場には自分のほかに危険だと散々警告したはずの人物

『篠ノ之箒』と『セシリア・オルコット』の姿があつたことにウオズは頭を抱える。

「いや、せつかくの仲間同士、友情を深めようと思つて。」

一夏のあまりのお節介にウオズは呆れたように軽いため息をする。

「聞いたぞウオズ、クラスの人とあまり話をしないんだつて？」

だめだぞ、学園生活を共にする仲間同士ちゃんとコミュニケーションをとらないと。」

ウオズは一夏の肩を掴み他の二人に聞こえないよう小声で話す。

(コミュニケーションは兎も角、よりにもよって何故

セシリア・オルコットと篠ノ之箒を誘った！言ったはずだ、彼女達は危険だと！)

(いやいや、ウオズは二人のことをよく知らないからそんなこと言えるんだ。)

(よく知ってる！だから警告している！)

(俺はそんなの信じないね)

(全くこの我が魔王は！)

一夏の甘い考え方に頭を悩ませながらウオズは二人の危険人物を見る。

箒はかなり不機嫌で仏頂面をしており

セシリアはニコニコしてながらも心では笑っていないと雰囲気で分かった。

恐らくなにか勘違いさせるような誘い方をしたのだろうとウオズは考える。

「それに箒、何かウオズに言う事あるだろ？」

それを聞いた箒は一瞬ビクッと体を震わせ、少し咳払いをしながら

ウオズを見る。

「と、常盤…先日は…その、すまなかつた！」

箒は頭を下げた。

先日…恐らく道場での一件だろう。

ウオズは箒の意外な行動に目を見開く。

ずっと暴力的な人だと思っていた人物が素直に頭を下げたのだ。

一夏に言われてやった感はあるが、それでも謝罪する筈の姿勢にウオズは素直に驚く。

ウオズ自身は竹刀で殴りかかったこと自体あまり気にしていなかった。

むしろ一夏に彼女がいかに危険な人物かを証明する為、あえて攻撃を煽るような行動をしたのだ。

しかし、筈が謝罪をしてしまったことで一夏の中の彼女に対する好感度が上がってしま

自分の行動が無駄になったことに苛立ちを覚える。

「…気にしてない。」

「そうか、良かった。」

良くは無い。とウオズ心の中で呟く。

「さて、じゃ、飯食おうぜ?。」

一夏はレジャーシートの上に座り持参した弁当箱を取り出す。

他の三人もつられるように座るが互いに距離をある程度開けてながら座る。

「一夏さん! わたくしサンドイッチを作ってまいりましたの!。」

「お! 本当か!。」

「サンドイツチ：その単語を聞いた瞬間、ウオズは顔を上げる。
「お、美味しそうだな。」

セシリアが持っているピクニックバスケットの中には綺麗に並べられたサンドイツチ。

一見普通に見えるがそれを見たウオズは顔色を青くさせる。

「さあ、神のお恵みを有り難く受け取りなさい!!一夏さん、あーん」
「な!?!」

サンドイツチを一つ掴み一夏の口元に運ぶセシリア。

その行動に思わず声を上げる箒。

それと同時にウオズは素早く一夏の背後に回り

「お待ちを!それは食べないほうがいい!」

そしてそのまま一夏を羽交い締めにする。

「ウオズ!?!」

「彼女の手料理は食べないほうがいい!」

「そ、そうだぞ一夏!私の唐揚げの方が美味いに決まっている。」

箒は弁当箱を急いで取り出し自作の唐揚げを一夏に見せる。

こればかりはナイスとウオズは心の中で箒に感謝するが、一夏は止まらない。

「まあ、なんて失礼な方達！」

「そうだぜ？せつかくセシリアが作ってくれた物だし、ちゃんと食べなくちゃ！」

「はい！一夏さん…あーん。」

「我が魔王!!」

「もごもおおお!?」

ウオズは両手で一夏の口元を強引に塞ぐ最終手段をとる。

「オルコツト君、君は自分の料理の一度食した方がいい。」

「まあ、神の才能を疑いますの?」

セシリアはサンドイッチをウオズの前に持ってくる。

「味付けは完璧ですわ、香りもほら、お気に入りの香水をかけましたの。」

「[「……」]」

それを聞いて固まるウオズと一夏と箒

確かにローズのいい香りがする…しかしそれはサンドイッチからしていい匂いだろ

うか?

「い、今何と?」

箒は聞き返す。

「お気に入りの香水…」

「馬鹿かお前は！料理に香水など使わん!!」

「それだけではありませんわ！」

本来使わない素材をふんだんに使ったこのサンドイッチはまさに…神級の一品！」

サンドイッチの中を見せようと食パンを捲る。

すると何故だか神々しい光が辺りを照らした、原因はサンドイッチ。

サンドイッチの自身が光っているのだ。

「これぞ神の才能ですわ！」

「何を入れたらそんな光を放つサンドイッチが生まれる!!?」

光るサンドイッチを作ってしまうなど悪い意味で才能的だ。

流石の一夏もこれは食えないと判断し食べるの諦めるが

セシリアは涙目になって一夏に訴える。

「一生懸命作りました…食べてくださりませんか?」

「…」

悲しませたく無い。

そんな正義感に駆られ、一夏はウオズ振り払いセシリアのサンドイッチ口に頬張る。

「一夏!?!」

「我が魔王!?!」

結果は言わずもがな…一夏の顔は真っ赤になったと思いきや急に青くなり、そのままその場に倒れてしまう。

「まあ、一夏さん！あまりの美味しさに倒れてしまいましたのね！」

「お前の目はどうなってる!!」

「しつかりしてください！我が魔王！」

ウオズはとつさにタブレット開き。

『織斑一夏はセシリア・オルコットのサンドイッチに耐える』

と記入し、一夏を抱え上げる。

「ウオズ…ウオズ。」

「…なんて馬鹿な真似を。」

「俺…少しは、お前のこと…信じるよ。」

そこで完全に一夏の意識が途絶える。

「ん我がまあおとおおおお!!!」

ウオズの叫びが雲ひとつない青空に響き渡った。

——こうして、ひとまずは歴史にはない大きな事件を乗り越えることはできた…し

かし、一夏の死の未来はまだ変わらずにいる。

これから起きる、事件・・・無人機の襲撃に黒きI Sの暴走・・・そして、鐘の事件。それ以外にも一夏が死んでしまう可能性のある出来事は数多くある。

一夏を魔王にすべく、そしてお守りするべく私は心を鬼にしなければなりません・・・。これから来る中国からの使者。

彼女は篠ノ之箒に続いてもつとも私が警戒する人物の一人
最悪、我が魔王の為・・・彼女を抹殺しなければならない。

第五話 怒りのドラゴン 前編

IS学園に通う普通の高校生『織斑一夏』には将来『魔王』になる未来が待っていたはずであった。

タイムジャッカー『リアス』の妨害でアナザーISと対立した織斑一夏であったが『未来の白式』本来の力『白式・超越』に覚醒し、セシリア・オルコット専用機『ブルー・ティアーズ』の力宿した形態フューチャーリングBTによつてアナザーIS撃破に成功したのであった。

ウオズの予定どおり超越に覚醒したとならば、ミライドウオツチ収集が今後の主な課題になるだろう。

しかしミライドウイツチを生成できるISは第三世代から・・・その世代は今の時代だともややく量産の目星がつく頃で種類は著しく少ない。

今後生成できるであろうミライドウオツチの数は凡そ3種程度

一夏はどのようにしてミライドウオツチを手に入れるのか、

そしてウオズは一夏の死ぬ運命を変える事が出来るのか。

彼らの戦いは始まったばかりである。

「来たね。」

ウオズはそつとタブレットPCを閉じ、タイムマジーンのメインモニターの一部を拡大する。

そこに映し出されたのは黒いIS

進路方向と照らし合わせるとその黒いISはまっすぐとIS学園に向かって行っていることがわかる。

「織斑先生、予言通りに来ましたよ。」

学園にいる織斑千冬に通信を入れる。

『まさか本当に来るとは……。』

「これで少しは信じてくださいましたか？」

『お前が提示した予言はまだある、全て当たるまでは無理だな』

「お厳しい事で」

ウオズがいる場所はIS学園から少し離れた海域

タイムマジーンのピークルモードあたりを飛行しながら周回、謎のISを待ち伏せ

今に至る。

現在 I S 学園ではクラス対抗トーナメントが行われており、謎の I S の目的はその対抗戦に出場している織斑一夏であることは、未来を知るウオズにはすでに分かっていたことだった。

「少々敵に回したく無い相手だが、我が魔王の王道を邪魔をする者は例え貴女であろうと！」

ウオズはタイムマジーンの色度を上げその謎の I S に向かって飛行、

ホルダーから取り出した自分の名前と同じウオッチを前に構えリユーズを押す。

『ウオズ！』

謎の I S も接近するタイムマジーンに反応して戦闘態勢に入る。

『タイムマジーン!!』

タイムマジーンはロボモードに変形、ライダーの文字がキラリと謎の I S を睨みつける。

「織斑一夏君！決勝進出おめでとおおおお!!」

「あはは、ありがとう…でもまたパーティ？勝つことにやるの？」

一夏は順調にトーナメントを上がり、ついに決勝前に進んだ。

クラスメイトはそれを祝うべく、食堂を貸し切りにし一夏の応援と決勝進出祝いのを含めたパーティが開かれた。

しかしパーティ自体は三回目…勝つたびに開かれるパーティにかなり疲れた表情を見せる一夏だった。

「いいじゃん織斑君！こういう行事はみんなで盛り上げないと！」

「流石織斑先生の弟！全試合無償で勝つなど、まさに千冬様伝説の再来よ！」

「デザート券も目の前！今夜はじゃんじゃん飲むぞ!!」

「おーおーおー!!」

「未成年だからお酒は飲んじゃダメだぞ?」

みんなワイワイ、ケーキやらバイキングやらを楽しみ、わやわやと騒ぎ立てる。

一夏の周りにも女の子が集まり、女特有のマシングントークが繰り広げられる。

「織斑君本当強いよねー、何か秘密の特訓とかしてる？」

「秘密って訳じゃあ無いけど、毎日ウオズとISで訓練しているぐらいしか…。」

「あー、常盤君ね」

トークの中で常盤ウオズの話題が上がる。

ウオズは一夏以外の生徒とあまり関わりを持たうとしない。

クラスメイト達の間でもウオズについて何の情報もない状態であった。

「常盤君って何者なんだろう…。」

「あまり話したこと無いからわかんないよねー。」

「ISの実施授業を見た感じ操縦はうまいのよね。」

「あ、私織斑君と常盤君が訓練してるとこ見たことあります！」

「うんうん！織斑君と互角に戦ってたよねー。」

「じゃあ、結構強いのかな？」

「でも、専用機持ちではないからどうなんだろう？」

「なんかいつも織斑君の側にいるよねー。」

「そうそう！常盤君見かける時結構の割合で織斑と一緒にだよ。」

「あれですか？やっぱり二人はそっちの関係？」

そっちの関係？

腐った女子の質問に思わず飲んでいたジュースを吹き出す一夏。

「いやいやそんな訳で無いだろ!!男が二人しか居ないんだ

自然にそうなるだろ?。」

「そんなんこと言つて実際はどうなんですか?」

「ウオズは…。」

自分はウオズをどう思っているか考える。

突然現れた未来人・・・。

なぜか箒とセシリアを敵視し、自分を鍛えてくれる友人?

いつも馬鹿にされていた『王様になる』という夢を真剣にサポートしてくれる

数少ない自分の夢を認めてくれたIS学園唯一の男子生徒。

あれ? 案外自分はウオズに対して好感度が高いな。

「俺の夢を…真剣に応援してくれている友達? みたいな…。」

「「きゃあー…!!」」

クラスメイトの黄色い声が食堂に響き渡る。

「なんか尊い! 尊いよ!!」

「完全にあつちの関係じゃ無いですかやだー。」

「今年の夏コミはこれでイけるな！」

「いやいや！お前ら少しその腐った思考から離れようよ!？」

その後、千冬が消灯の知らせが来るまでパーティーが続き22時によく寮の部屋に帰ってこれた一夏。

ドツサとベットに横になり、天井を見る。

「はあ…連続パーティーは流石に疲れるよ。」

それに女子の会話になかなか付いていけないし。」

疲れたと、ため息をしたと同時に扉の開閉音が聞こえる。

「おや、先に戻られていましたか我が魔王。」

入ってきたのはウオズだった。

結局のところ部屋割りには寮長である織斑千冬と相談し、ウオズと相部屋になることが決まった。

若干納得していなかった筈だったが、思春期真っ只中の状態の男女二人を一緒にするのは良くないとの

判断に至った。

「あ、お帰りウオズ。」

「そう言えば今日の試合会場に居なかったけど、どこ行ってたの？」

準決勝が行われた今日

応援席にウオズの姿はなかったのだ。

「少し邪魔者を排除していた。」

「邪魔者？」

「本来の歴史によると、クラス対抗トーナメントは謎の無人機 I S の乱入により中止になると書いてある。」

「無人機 I S だって？」

「ええ、歴史通りであれば我が魔王が負傷しながらも打つと書いてありますが、流石にそれでは困るので私自ら排除に向かいました。」

「マジかよ。」

「一夏の試合を邪魔させないように無人機 I S 『ゴーレム』を相手に待ち構えていたのだ。」

「そんなウオズの働きに関心ながら、一夏は気になっていたことを話した。」

「なあ、ウオズは何で俺に使えているんだ？」

「言った筈です、私は貴方の忠実なる僕……。」

「いや、それは分かってる！なぜ未来の俺に使えているんだって話。」

未来の自分がウオズに一体何をしたのか・・・どうしてそんなに忠誠心が有るのか純粋に気になった。

「我が魔王には返し切れない恩があります。」

「…恩？それって一体…。」

「これは未来の話…これ以上話すことはありません。」

ウオズは首を横に振り、自分用に入れていたお茶を静かに啜る。

本人が話したがらないのなら無理に聞こうとせず一夏は取り敢えず

納得する事にする。

「…分かった。」

「さて、決勝は明後日…今のうちに相手の情報を」

「お休みーウオズー。」

一夏はウオズから逃げるようにベットに潜り込んだ。

「……。」

次の日、一夏、ウオズ、セシリア、箒と一緒に食堂で朝食を摂っていると女子達の会話がふいと耳に入る。

「聞いたー？例の話？」

「聞いた聞いた！二組の転校生の話でしょ？」

「そうそう！なんでも中国の代表候補生だつて！」

「中国の代表候補生かー。」

中国という単語に反応し、一夏が呟く

「気になりますの？一夏さん？」

「まあな、中国には知り合いがいてな。」

一夏の脳内にツインテールの少女を思い浮かべる。

「まあ、そうでしたの。」

「おう、幼馴染で中学の時良くつるんでたなー。」

「お、幼馴染は私だろ!？」

バンつと机を叩き立ち上がる箒。

「机を叩かないでくれ篠ノ之箒、味噌汁が溢れる。」

「す、すまん。」

ウオズに注意され、すこし体を縮めませながら着席をする筈。

「いや、筈と入れ替えで入ってきた子だって、なんていうかセカンド幼馴染?」

「セ：セカンド。」

「ウオズはどうせ知ってるだろ? 彼女の事?」

「ええ、知っていますよ。」

「どうやら上手くは行かなかったようですが・・・。」

ウオズはタブレットを見ながらそう答える

「上手くないかった?」

「一体なのことを言っているのか理解できなかった一夏。」

「え? なんの話?」

「それは「いいいいいい一夏さん! 今彼女! 彼女とおっしゃいましたわね! まさかその幼馴染と言うのは女性の方ですの!」

しかし、その答えを聞く前にセシリアが割って入り慌てて一夏を問い詰め始めた。

「え、そうだけど・・・。」

「一夏! 私という幼馴染が居ながら他の幼馴染と浮気か!」

今度は筈が机を叩かず立ち上がりセシリアと一緒に一夏を問い詰めた。

その2人に対しウオズはご飯を食べながら冷たい目線を送るのであった。
「どう言う意味だよそれ…。」

箒のセリフに困惑する一夏。

そこにある生徒が一夏の名前を呼ぶ。

「一夏！」

「あ、噂をすれば！紹介するよ彼女が幼馴染の…。」

「って、えええええ!!鈴!!どうしてここに!?!」

この場に居ないはずの一夏の幼馴染である『凰鈴音』の登場に思わず声をあげて驚く一夏。

「どう?驚いたでしょ?内緒でこの学園に編入してきたの!」

「はあーマジかよ…驚いたな…。」

一夏を頭を掻きながら、鈴との再会を喜ぶ。

「お前バカだから偏差値の高いIS学園に絶対入学出来ないと思ってたから。」

また会えて嬉しいぜ。」

「バ…バカ言うんじゃ無いわよ!せめて運動付けなさいよ!運動バカって!」

「いや、運動バカはいいのかよ。」

四人席に強引に入つていき、一夏との会話を楽しむ鈴。

その様子に苛立ちと嫉妬を覚えた箒とセシリアはかなり不機嫌な表情で二人を見ていた。

「まつさか中国の代表候補生になつてたなんてなー。」

「ふふん！昔から私は運動が得意で知つてるでしょ？

中国政府がその才能を認めたわけ。」

「運動しか取り柄なかつたもんなー！」

「そういうこと!!」

一夏の言葉に棘がある事に気付かない鈴。

「こほん、こほん！」

「一夏…彼女が例の？」

「おう！幼馴染の凰鈴音。」

鈴、こいつが篠ノ之箒だ。前話した。」

「貴方があの篠ノ之箒ね…。」

鈴は箒の顔を凝視する。

すると何かを察し、ニヤリとした表情で箒に言う。

「な、なんだ？」

「私、負けないわよ。」

「!!」

負けない……互いに恋敵として認識され、箒はムツとした表情で鈴に言い返す。

「私こそ……」

「こほん！わたくしの事もお忘れなく？」

わたくしはセシリア・オルコット……イギリスの代表候補生にして神の才能をもつ……」

「ねーねー、私が居なくて寂しかった？」

「え？あ、うーん……」

セシリアが箒のセリフを妨げ、自己紹介を始めるが鈴はセシリアを無視し一夏に擦り寄る。

さすがの一夏も鈴の冷たい態度に苦笑いを隠しきれない。

「ちよつと！最後まで話を聞きなさい！」

「悪いけど他の国の事なんてどうでもいいのよねー。」

「な、なんですつてー!!」

セシリアが鈴に言い寄っている隙にウオズは食べ終わった朝食のトレーをもって一夏の元へ行く。

「我が魔王、少し宜しいですか？」

「え？お、おう」

一夏を連れ、三人から見えない位置にある柱の陰に場所を移動し、小声で話す。

「我が魔王…失礼ながらあの『鳳鈴音』という女は…。」

「いや待て、分かるぞお前の言いたい事。」

一夏はすぐに察した。

「あいつも危険だつて言いたいだろ？」

「ご名答、この先の未来…貴方は彼女に殺される可能性が高い。」

数日編入を遅らせるよう手段は尽くしたのですがやはりこの学園に来るのは『運命』
だったようでしてね

、出来れば在学中彼女とは関わりを」「いや、それは無理だ。」

「……。」

一夏は真剣な顔でウオズを見る。

「鈴は大切な幼馴染で親友だ…彼女の事は俺が一番知っている。」

そんなこと…絶対にあり得ない。」

鈴とは心を許しあっている『親友』といっても過言ではない関係だ。

箒やセシリアよりも彼女との関係はより深く暑いものであり

仲間や友人を最も大切する一夏にとってウオズの言った忠告は絶対的に信じる事ができない内容だった。

「……では、私から言う事は何もありません。」

「え？」

「では、私は先に教室に行ってます。放課後訓練がある事をお忘れなく。」

しかしそれは、ウオズもわかっていた事だった。

以外にも食い下がって来なかった事に対し驚く一夏を他所に、さっさと食堂を出るウオズ。

そして、少し歩いたところでタブレットを開いた。

（我が魔王が『鳳鈴音』に関して、私の言う事に耳を貸さない事は知っていた。

本当は始末したいところだが……。）

『鳳鈴音』

中国の代表候補生であり織斑一夏の二人目の幼馴染。

可愛らしい見た目とは裏腹に気性が荒く一夏に危害を加えるであろう危険人物の一人。

小学五年のとき一夏と同じ小学校へと転校、最初は仲が悪かったものの彼女の窮地を織斑一夏が救った事により

二人は互いに絆を深め、次第に親友と呼べる関係に至った……が、彼女自身は密かに恋心を抱く。

両親の離婚の関係で中国に帰国する時、織斑一夏にプロポーズを図るが、意味を勘違いされ不発に終わる。

その後一夏に会うべく中国政府に無理やり融通を通しI S学園に途中編入し今に至るが……

タブレットに書かれている鈴の未来や過去の経歴に目を通し、ウオズは鼻で笑う。
(どうやら……私が直接手を下す必要は無いようだ。)

タブレットに書かれていた情報には続きがある……それは、

『凰鈴音』の死亡に関する情報だった。

その日の放課後、第二アリーナにてウオズと一夏は明日の決勝に向けて特訓をしていた。

『ジカンギレード ケン！』

『ジカンドレスピア ヤリスギ！』

一夏とウオズは互いに武器を取り出し、睨み合う。

ウオズが纏っているのは貸し出し用の訓練機、日本第二世代量産型機 I S 『打鉄』

しかし、持っている武器は明らかに、打鉄の武器ではなかった。

槍のような武器……どこか一夏の持っている『ジカンギレード』に似ている部分があった。

「ずっと思ってたんだけど、それ打鉄の武器じゃ無いんだろ？」

「ええ、これは I S とは別の兵器に搭載されている武器です。こつちの方が使い勝手がいいのでね。」

ウオズはそう答えると、ジカンドレスピアを構え一夏に攻撃を仕掛ける。

「では、行くぞ、一夏君！」

「つく！！」

迫り来るウオズの攻撃をジカンギレードで受ける、一夏。

「うおおおおおお!!」

一夏も負けじと攻撃を仕掛け、互いに距離をとったところで、刃を折りたたむ。

『ジユウ!』

今度はエネルギー弾をウオズに向けて発射、ウオズも刃部分を折りたたみ『?』のような形をした形状に変形させる。

『ツエスギ!』

その先端からバリアーが生成され、一夏のエネルギー弾を跳ね返す。

バリアーならと一夏は片手に雪片式型を装備し零落白夜を発動、無効化能力を使いそのバリアを切り裂こうと接近しようとするが……

『カマシスギ!』

ジカンデスピアを鎌状にし一夏にカウンターをかける。

「な!」

とつさに二本の剣で攻撃を受けるが、ウオズは片手にISに備え付けてある実弾銃を装備し、一夏に銃撃を与える。

「つく!」

「どうした、我が魔王……相手の動きをよく見るんだ。貴方ならできるはずだ。」

「そこまで！」

「はあ…はあ…。」

模擬試合は一時間もかかり、結果はS Eの僅差でウオズの勝ちとなった。

「いい調子だ我が魔王…これで明日の試合は問題無いだろう。」

「またウオズに負けた！」

ISを解除し悔しそうにスタジアムに大の字になる一夏。

「いいえ、私も段々と追い詰められてきました。」

もう少して私の実力を上回るでしょう…では私はISを返却してくるので失礼する。」

「おう、先に帰ってるぞ！」

一夏も更衣室に戻り、ベンチで少し休憩をする。

しばらくすると、頬に何か冷たい感覚がし、驚きながら横を見る。

「な!？」

「はいコレ。」

そこにいたのはスポーツドリンクを持つていた鈴だった。

鈴は一夏が訓練していることを知り、スポーツドリンクを持参し待機していたのであった。

「お、鈴！」

「気がきくじゃん！サンキュ！」

スポーツドリンクを受け取り、それを喉に流し込む一夏

それを見ながら鈴は一夏の隣に座りある事を聞く。

「聞いたわよ、まーだ王様になりたいんだって？」

「ああ！俺は将来最高最善の王になる！」

鈴も一夏の王になりたいという夢を知っていた。

「ぶれないなー」

少しの間会えないでいたが、相変わらずの一夏であり、安心をする鈴。

そして、中国に帰国前に交わしたある『約束』の話を持ち出す。

「ねえ、あのさ。」

「なんだ？」

鈴は顔を赤し、心拍数が早くなる。

その約束の内容故の症状。

一呼吸し、覚悟を決め話を続ける。

「その、中国に行く前に私とした約束って覚えてる？」

「約束？」

「そう！約束！覚えてるわよね?!」

一夏は目をつむり、記憶を巻き戻す。

「ああ・・・覚えてるぜ！」

「本当!?!じゃあ・・・返事は？」

「戻ったら酢豚、毎日おごってくれる話だろ？」

「は？」

一夏の返事に絶句する鈴

「鈴の酢豚うまいんだよな！それを毎日食えるなんて・・・ありがと。」

思った返事が返ってこない上に誠心誠意、勇気を振り絞って言った『告白』を勘違いした一夏に対し

鈴は人生最高レベルで激怒する。

「さいつてー!!!」

鈴は思いつきり立ち上がり、一夏の胸ぐらをつかむ。

「え、ちよちよちよ!?!」

「女の子の約束をちゃんと覚えてないなんて最低よ!」

「いや、覚えていただろちゃんと! 『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』って

つまりそういうことだろ?」

「意味が違うのよ意味が!」

「意味?意味って?」

『貴方が好きです』という意味、しかし素直になれない鈴が言えるはずもなく、ただただ怒鳴るばかりだった。

「自分で考えなさい!!」

鈴の怒りのボルテージが限界値を突破。

反対側の腕にISを部分展開すると、それを思いつきり一夏の顔面めがけて振りかざ

す。

「ちよーばっ!」

「バカ!知らない!」

ドツゴン!と大きな音を立てながら吹き飛ばされる一夏。

鈴は怒りで顔を赤くしながら更衣室を後にする。

「いつつ…つて、あれ?」

殴られたであろう頬を撫でながら一夏が立ち上がる。

しかし痛みは吹き飛ばされた時の痛みだけで、顔面自体はなぜか無傷だった。

足元に手のひらサイズのロボ『コダマスイカアームズ』が煙を上げながら倒れてた。

「お、お前が守ってくれたのか?」

しかし返事は無し、コダマスイカアームズは壊れ、機能を停止していた。

予め護身にウオズから渡されいたコダマスイカアームズ。

彼はあの一瞬で一夏をかばいI Sの攻撃を全て受け止め、その役目を果たしたのだ。

一夏は小さな救世主を拾い上げ、頭部を撫でる。

「そうか、ありがとう。」

後でウオズに頼んで修理してもらおうな、と言葉を続け、鈴が出て行った方を見る。

「鈴怒ってな…何でだろ…約束は覚えているのに。」

「おつかれー!」

「お疲れ様!」

第一アリーナ前。

一年二組のクラス代表『三条美香』とその友達『村上純子』は試合に向けた訓練を終え

寮へ帰宅しようとして道を歩いていた。

「明日の試合頑張つてよ? 明日の相手はあの千冬様の弟だし

今ところ無償で勝つてるからかなり手ごわいよー。」

そう、一夏はほぼ無傷で勝っているダークホース的存在。

美香自身も今回の訓練はかなり気合を入れて行っていた。

「大丈夫! 特訓はバッチリだし予習も済んでる、必ず勝つて皆んなの為にデザート券手に入れるよー!」

「おー! その粋だ!」

「ねえ、今の二組クラス代表って貴方?」

二人が盛り上がっていると、そこに『鳳鈴音』が現れる。

「え、貴方は確か今日転校してた。」

「代表…：変わりなさい！」

「え？」

「だから！代表変われって言ってるの！」

鈴は腕を組み代表である美香を睨みつけ威圧する。

「はあ？ちよつと待って！」

そんな事急に言われて無理に決まってるでしょ！」

純子が鈴の前に立ちはだかり、美香を下がらせる。

「それに美香は明日の為に一生懸命特訓して…。」

「専用機は？」

「え？」

「専用機…：持ってないでしょ？」

それに私は中国の代表候補生…：実力差は明らかだよね？

強い奴が代表になって何が悪いのよ？」

鈴は自分の専用機であるピンク色のブレスレットを二人に見せつける。

「そ、そんなのアンタの勝ちじゃん！」

美香は日本代表を目指しているの！ここで活躍しないと…。

「私に関係無いわ。しのごの言わずに変わりなさいよ！」

鈴は純子をどかし、美香を突き飛ばした。

「うー！」

「美香!!」

美香は思いつきり地面に尻餅を付き、怯える目で鈴を見る。

「ヒョロっちいわね、もつと筋肉つけなさい筋肉。そんな貧弱じゃあ日本代表なんて無理ね。」

現代代表候補生の私が言うんだから確かよ。」

「なっ！なんですって・・・あんたいい加減に!!」

「強い人が代表になった方がいいんじゃない？貴女達もデザート券が手に入るし、私は試合に出れる。」

ウエンウエンな関係ってヤツ。」

おそらくWIN—WINと言いたいのだろうが

今は突っ込んでいる場合ではない。

「あなたね!!」

それを聞いた純子が今にも殴りかかりそうな剣幕で鈴に向かつていく。

「待って純子ちゃん……。」

「え、美香!?!。」

しかしそれを美香が止める。

「そうよね……私より強い人が代表になった方が皆んなの為だよね?。」

「あら? 話が分かるじゃない。」

「じゃあそう言う事で先生に話付けといて。」

「あ、ちよつと待ちなさい!。」

美香の返事に納得し、純子の呼び止めを無視しながらその場を後にする鈴。

鈴の姿が消えると同時に美香は体を震わせながら近くのベンチに座りこんだ。

「美香! 貴方それで良いの?!。」

「……彼女、専用機持ちだし代表候補だし……純子ちゃんも皆んなも勝率は高い方がいいですよ……。」

「美香の夢は! 夢はどうするの!?! ここで活躍して企業や政府にアピールして、いずれ日本の代表になるんじゃないの?。」

「……チャンスはまだあるよ……きつと。」

「……。」

ポツリと美香の太ももに雫が落ちる。

「美香……貴女。」

「ごめん純子ちゃん……少し一人にして。」

美香は目を擦りながら純子に弱々しい声で話す。

純子は何を言っているのかかわからず、寮の前で待っていると美香に伝えその場を後にする。

一人つきりになった美香はISスーツの入ったバックの持ち手を

悔しさや怒りを込めて強く握り締める。

『悔しいよねー？そうだよねー？』

時間が止まり、美香の隣にフードを被った少女が現れる

「え!?君は?」

『私タイムジャッカーのリアス!貴女にとってとーっても美味しい事教えて上げる。』

「え?」

タイムジャッカーリアスは懐からアナザーウォッチを取り出す。

『私と契約すればなーんと、ちよー強力な専用機がこの場で貰えまーす。』

専用機さえ有れば貴女にも勝機があるし何よりもアイツを見返せる存在になるよー

『？』

「…専用機」

『専用機が無ければ試合で活躍する事もなく、代表になる夢が砕け散っちゃいますよー。』

「さあ？どーする？』

「……私は。」

美香自身、ちゃんとした実力で専用機を手に入れたかった。

返答に悩んでいるとリアスは一瞬、無表情になる。

『まあ、勝手にしちゃうんだけどね』

リアスは返答を聞かずに、アナザーウォッチを彼女の腹部めがけて押し込む。

アナザーBTのように力を吸収し形を変えた新たなアナザーウォッチに満足し笑みを浮かべるリアス。

リューズを押すと禍々しい音声とともに新たなアナザーISの名を読み上げる。

『甲龍』

第六話 怒りのドラゴン 中編

一年クラス対抗トーナメント決勝戦当日。

会場には一年生徒全員と織斑一夏の活躍を見に来た他の上級生生徒の一部が試合を見に来ており

定員数が120パーセントを超える程の、熱気にあふれていた。

管制室にいる山田先生はそれを感じしながらも同時に

なぜか自分の隣に当たり前のように座っている常盤ウオズが存在が気になっていた。

「あのー…。」

「何でしょう山田先生？」

「常盤君はどうしてここに居るのでしょうか？ここは関係者以外

立ち入り禁止のはずじゃ…。」

「私が許可した。」

ウオズの代わりに入室してきた千冬が答える

「お、織斑先生!？」

「この場所の方が色々都合が良いだろう。」

管制室はアリーナ全体が監視できいつ敵がきても良いよう対応が出来る。

少しは自分を信用してくれたのかと嬉しく思うウオズ。

「おや、随分と信用してくださったようで？」

「勘違いするな、近くにいた方がお前を監視出来る。」

悪魔でも自分の監視名目と素直になつてない千冬に対して

ウオズはやれやれと言わんばかりに両腕を軽く上げる。

「一夏の様子はどうか？」

「試合に向けた訓練は完璧、後は本人次第でしょう。」

三人は巨大なモニターの片隅に映る待機室を見る。

試合に向けて準備運動をしている一組の代表選手織斑一夏とその応援に来たクラス

メイトの箒とセシリアの姿があった。

「相手は所詮一般生徒・・・一夏さんの敵ではありません！」

「いや、油断はいけないよセシリア。俺は全力でいく！」

一夏はセシリアに対し少し苦笑いを浮かべながらも

気合を入れ直し、白式を展開する。

「頑張れ一夏、応援しているぞ！」

「ありがとう箒！」

箒のエールに右腕を上げ、カタパルトに脚部を乗せ射出準備をする。

「織斑一夏…行きませす！」

スタジアムの中央で五分ほど待っていると何故か対戦相手である二組クラス代表選手がISを纏わぬままISスーツ姿でスタジアムに出てくる。

不審に思った一夏は二組クラス代表『三条美香』に声をかける。

「え、えつと三条さん？その、ISは？」

美香は口角上げ、生気の無い目で一夏を見る。

「有るよ…とっておきの。」

瞬間美香の体を黒いオーラが包み肉体を変えていく。

白目をむき歯茎が露出した、ピンク色の異形。

爬虫類の鱗の様な装甲は生々しく、その姿は正しく龍の怪物。

形状はだいぶ違うが以前対立したIS型の怪人

『アナザーIS』だと一夏は直ぐに理解する。

「まさか、お前!!」

一夏は素早く武器を構えるが…。

謎の衝撃波によって自分の体が数十メートル吹き飛ばす。

直ぐに姿勢を立て直す。又もや謎の衝撃波によって吹き飛び観客席を守るシールドに激突する。

「つく!!今のは!!」

止まってはダメだ!

そう判断し、一夏は不規則に白式を飛行させアナザーIIS翻弄する。

「ま、何なんですかアレ!!」

「あれはアナザーIIS!!」

アナザーIISの出現は管制室にいる三人にも分かった。

「この前と同じやつか?」

「ええ。」

「あのIIS:中国の第3世代機『甲龍』と同じ反応を示しています。」

山田先生はアナザーIISのコアを読み取りそれが中国の機体

『甲龍』で有ると千冬報告する。

「さしずめ『アナザー甲龍』ですね。」

それを聞いたウオズはアナザーIISを命名する。

「どうして、来るのが分からなかった？」

ウオズは未来を知る未来人。

以前彼が提示した予言にこの様な事件は聞かされていなかった。

意図して隠していたのかそれとも…。

「未来を知っていてもアナザーIISの出現まではわかりません。あれは歴史から外れたもの…ですから未来の情報には載りません。」

歴史とは違う歪んだ存在…それがアナザー系統の怪人の特徴。

その出現を予知することは未来のタブレットでも不可能なのだ。

「お前、一体何なんだ！」

『どう？私の専用機…これで貴方を倒して日本の代表になるの!!』

「ぐうあ!？」

またもや謎の衝撃波が一夏を襲う。

「また!?!今の攻撃。」

『我が魔王』

白式に通信が入る…相手はウオズだ。

「ウオズか!あれもアナザーIISという奴だろ?！」

『そう、あれはアナザー甲龍。』

「『甲龍』？」

数日前の授業で聞いた覚えがある…。

中国の第3世代ISだったか。

一夏は記憶を辿り、『甲龍』には弾道が見えない武装が搭載されている事を思い出す。

「…だったらあの攻撃…衝撃砲って訳か。」

『ええ、勝つ条件は前回のアナザーB Tと同じ。』

「同じ甲龍の力をぶつける…か。しかしIS学園に中国の第三世代なんか無いぞ？」

『風が持っているはずだ』

ウオズとの通信のはずが自分の姉である千冬の声が

流れてきた事に驚く一夏。

『千冬姉!?! どうしてウオズと?』

「織斑先生と呼べ…まあ、ちよつとな。山田先生、風と連絡取れるか？」

「今コールしています。」

山田先生は端末を操作し、鈴が持つ専用ISに通信を入れる。

「出ませんね。」

しかし数分経っても彼女からの返事は無かった。

「彼女のことだ……織斑か自分のクラスの応援にアリーナに来ているはずだが。」

「……もしや。」

ウオズは眉を潜める。

「どうした常盤？」

「彼女はあのアナザーISSに……。」

そう、彼には心当たりがあつた。

ウッチホルダーから赤い鳥の絵柄が入った銀色のウオッチを取り出し

鳥型に変形させる。

『タカウオッチロイド♪（タカ！）』

「な、何ですかそれ!？」

「鳳鈴音を探してくれ」

驚く山田先生を無視しウオズは『タカウオッチロイド』に指示を出す。

『サーチホーク！（探しタカ・タカー♪）』

それに領き、何処かに向かつて飛行するタカウオッチロイド。

ウオズも後を追う様に管制室を出る。

「お、おい！どこに行く常盤！」

「コレ通りだったら彼女はおそらくこの世にいない。」

ウオズは千冬にタブレットを見せる。

「……なんだと!?!」

千冬は額に汗を滲ませる。

数分後ウオズの所へ戻って来たタカウオツチロイドの案内で

校庭のかなり端にある目立たない木の下で寝そべっている少女を

発見する。

「……やはり。」

「………風。」

そこにいたのは見るに耐えない無残な姿をした一夏の幼馴染『鳳鈴音』

「この外傷……恐らく衝撃砲によるもの。アナザー甲龍が彼女を殺害したようだ。……死ぬ

のはわかってはいたが、まさかアナザースの仕業だったとは。」

「貴様! 鳳が死ぬのをわかっていて見捨てたのか!?!」

「見捨てたなんて人聞き悪い、これは歴史通りの出来事だ。」

それに……。」

ウオズは鈴を見る。

「彼女は非常に感情的で、暴力的……気に食わない事があれば規則を平気で破り、生身の人間に兵器を用いて攻撃する……彼女は危険人物だ。未来が織斑一夏の死に傾いている今、彼女が居なくなるのは我が魔王を守るのに好都合だった。」

言い返そうにも千冬も鈴の暴力性は前々から知っていた。

教師として、知り合いとして、彼女を擁護できない自分に苛立ちを覚える。

「……しかし、彼女は一夏の大切になっている友達の人だ。」

そんなことをしても一夏が悲しむだけだぞ。」

「……それは重々理解しています。」

ウオズ表情に若干の曇りを見せる。

「……。」

しばらく沈黙が続くが

それを断ち切るかの様にファイズフォンXから着信音が鳴る。

『〜♪』

「……我が魔王」

「一夏！」

電話の相手は織斑一夏。

親友の死などどの様にして伝えればいいのか……酷く悩む千冬を無視し

ウオズは電話に出、千冬に聞こえるようにスピーカーモードにする。

『ウオズ、そういえば鈴って中国の代表候補生だったよな、専用機持っているんだろ？それでどうにかならないか？』

何時も馬鹿で鈍感な弟だが、どうしてそこに気が付いてしまったのか

千冬は何か言おうと口を開くが言葉が出でない。

ウオズは弟想いの彼女がこの様な残酷な現状を一夏本人に言うのは

不可能判断し千冬に変わり現状を告げる。

「我が魔王…風鈴音はアナザーIISによって殺されました。」

『……………は？』

「今から甲龍のミライドウオッチを持ってそちらに行くのでお待ちを。」

『おい、待てよ…鈴が死んだって…嘘だろ？』

「……………事実だ。」

千冬も覚悟を決め、一度深く深呼吸し一夏にウオズの言うことが真実と伝える。

「……………」

スピーカーの奥で絶句する一夏。

ウオズは鈴の元へ近寄る。

「彼女は本来の『甲龍』の持ち主。彼女自身からミライドウオツチが生成可能です。それを使い、アナザーIISを倒してください我が魔王。」

悲しむのはその後です。」

鈴の遺体にかざしたブランクミライドウオツチはピンク色の発光と共に『甲龍ミライドウオツチ』に変化する。

「鈴が…。」

一夏は目を見開きウオズと千冬が言った事実を飲み込めないでいた。

鈴という名前に反応しアナザー甲龍は軽く鼻で笑う。

『ああ、そう言えば彼女…最後に貴方の名前呼んでたわね…知り合ってたの?』

「お前が…鈴を殺したのか?」

一夏の問いに対してアナザー甲龍は「あちゃーっ」と額叩いた。

『あー、死体見つかったのかー…そうだよ、私が殺した。』

あつさりと自分がやったと認めたアナザー甲龍。

悪気がない言いように一夏の中の感情は火山の如く噴火する。

「お前えええええええ!!なんで鈴を殺したあああああ!!」

ジカンギレードをケンモードにしアナザー甲龍に突進する一夏

「なんで!なんでなんで!!」

一夏はひたすら負の感情的に任せてアナザー甲龍を切った。

切って切って切って切り裂いた。

しかしダメージは与えられてもアナザー甲龍は直ぐに傷を癒す。

アナザーIISはオリジナルのIISでないと倒せない。

それを分かっているながらも一夏は彼女に対する無意味な攻撃を止める事が出来な
た。

『うるさい!!』

アナザー甲龍は必要以上に攻撃してくる一夏に対し苛立ちを込めた

衝撃砲を食らわせる。

「ぐあ!!」

近距離で命中した衝撃砲は白式のSEを大幅に減らす。

『なぜ殺した?・・・そんなの当たり前じゃない!』

大型の青龍刀を二本装備し、お返しだと言わんばかりに一夏に斬りかかるアナザー甲

龍。

『彼女は私をクラス代表から強引に降ろして、自分が代表になろうとした。』

「ぐう!!」

ジカンギレードと雪片を使い青龍刀を受け止め罅迫り合いになる。

『私は必死で特訓して、クラスの皆んなの期待に応えるために…自分の夢を叶える為に今まで頑張ってきたのに!!』

脚部を一夏の腹部にぶつけ、衝撃砲を撃つ。

「つがああ!!」

『あの女は私の全てを奪おうとした!私の全てを否定した!自分の都合を棚に上げて!!』

二本の青龍刀の連結し、衝撃砲で吹き飛んだ一夏にめがけてそれを

投擲。

一夏は直ぐさま態勢を立て直し飛んでくる青龍刀をジカンギレードのエネルギー弾で打ち抜き軌道をそらし、何とか回避をするが…

『あの女がいるとクラス代表の座が奪われる…私の夢が奪われる…だから殺した!』

再び打ち出された衝撃砲で白式はバランスを崩しスタジアムに墜落する。

「つぐ!鈴が…そんなこと、するわけ…!」

そんなことするハズが無いと思いたい一夏だった…

しかし彼女：アナザー甲龍から発せられる怒りは本物だった。

三条美香という生徒は責任感が強くかなりの努力家だという評判は

一夏の耳にも入っている。

その三条美香がここまで怒り散らしているということは

彼女の言う事が全て嘘とは言い難い。

何故鈴は彼女に酷い事を言ったのか。

何故強引にクラス代表になろうとした…。

その答えは自ずとわかった。

「まさかクラス代表になって、俺と…。」

自分と戦うため。

それ以外考えられない。

昨日の喧嘩…

自分を敗北させる事で鈴は鬱憤を晴らそうとしたのだ。

『さあ、試合を続けましょう？この試合に勝ったら私の夢にまた一步近づける！』

アナザー甲龍はスタジアムに落ちた二本の青龍刀を拾い上げ、一夏に向かって斬りか

かる。

「……っぐ!!」

白式を立て直すが回避が間に合わない。

とつさに防御態勢を取ろうとする。

しかし、その攻撃は何者かの妨害によって止められる。

『なに!?!』

『タイムマジーン!』

斬撃を受け止めたのはウオズが操る『タイムマジーン』

タイムマジーンはそのまま二本の青龍刀を蹴り上げ無防備になったアナザー甲龍に向けて飛び蹴りを繰り返す。

『っく!』

「ウオズか!」

アナザー甲龍をスタジアムの端まで吹き飛ばし安全を確保したところでコックピットのハッチを開きウオズは『甲龍ミライドウオッチ』を一夏に向けて投げる。

「我が魔王!!」

一夏はウオッチをキャッチしリユーズを押し。

『甲龍』

そして、そのままBTミライドウォッチと同じ手順でドライバーに

装填、固有能力のフューチャータイムを発動させる。

『投影!!フューチャータイム!』

ピンク色の装甲が形成され、鈴の専用機だった

『甲龍』を投影する。

『甲・燃・龍!!フューチャリング甲龍!甲龍!!』

胸部装甲に大きく『甲』と『龍』の文字。

V字のアンテナが龍の角の様に伸び、背部には龍の頭部を模した二基の衝撃砲。

二本の大型青龍刀を携え、『白式・超越フューチャリング甲龍』は演舞の様に舞い、武器をかまえる。

『祝え!全ISの力を受け継ぎ過去と未来を知ろしめす王者の衣。』

その名も『白式・超越・フューチャリング甲龍』

また一つISの力を継承した瞬間である。』

タイムマジーンの中から一夏を祝福するウオズ。

『こんなところで負けられない!』

復帰して衝撃砲を打つアナザー甲龍:それを相殺する様に一夏も衝撃砲を打ち出す。

『な!』

自分と同じ武装で相殺されたことに驚くアナザー甲龍。

「くぐぐ!!」

『つく!!』

接近する一夏に対し抵抗の衝撃砲を打つ。

一夏は青龍刀を連結し前方で回転させる事によって衝撃砲のダメージを防ぎ、一定の距離に来たところでそのまま青龍刀を投擲する。

投擲した青龍刀は相手の二基の内の右側一基の衝撃砲に命中し破壊。

『…!!』

そしてそのまま、イグニッションブーストで接近し零落白夜でもう一基の衝撃砲を切り落とす。

衝撃砲の爆風で怯むアナザー甲龍：その隙を突き

ドライバーのレバーを引き押し込みウオッチのエネルギー衝撃砲にチャージする。

『ビヨンドザタイム！超圧縮衝撃波道!!』

『嫌！私は！私は!!』

亡くなったお姉ちゃんとの約束を果たすために・・・私は!!』

打ち出された高出力の砲弾はアナザー甲龍に命中し、地面に激突。

衝撃で出来た巨大なクレーターがその威力を物語っていた。

『ぐああああああ!!』

直撃を食らったアナザー甲龍は爆発四散。

爆煙の中から三条美香が現れ、体内からアナザーウオッチが飛び出し消滅、そのまま気絶をする。

「……………」

戦いには勝ったが生まれる虚無感。

自分の知らないところで犠牲があった。

大切な存在である幼馴染で親友の『鳳鈴音』の死。

誰がやった？それは目の前にいるアナザー甲龍こと三条美香だ…。

が、加害者の前にしても一夏は彼女を憎む事が出来無かった。

彼女の夢を鈴が奪おうとした…鈴はそれ相応の報復を受けたのだと納得してしまう自分がいる。

もし、その時に自分がいれば鈴を止められたのかもしれない。

鈴を救えたかも知れない。

元を辿ればちゃんと約束を理解できなかつた自分が悪い。

一夏はひたすら自分を呪い後悔をした。

鈴を殺したのは自分だと。

「……ああああああああああ!!」

一夏の叫びがスタジオに響き渡る。

「……。」

事件が起きてから3日後……。

鈴の遺体があった木下には多くの花が手向けられていた。

一夏、箒、セシリアも花を手向け、手を合わせる。

「……鈴」

一夏はこの三日間、この場所に通い詰めている。

それもそのはず、鈴の遺体は中国政府の手回しで即急に遺族に送られ、一夏は鈴の遺体に会うことができなかつたのだ。

最後に覚えているの鈴の表情は口論で激怒した顔。

なぜあの時喧嘩をしてしまったのか……一夏に強い後悔が残る。

「すまん二人とも、一人にしてくれないか？」

ここにいれば、鈴に会える・・・そう思ってしまう。

「一夏さん…わかりました…先にもどってますわね。」

「…一夏。」

二人がその場を去り、しばらく経つとポツリと雨が降る。

一滴二滴と徐々に数を増していき、大雨となつて一夏を濡らす。

「俺が…俺のせい…。」

しかし、いくら濡れおうと一夏はその場から離れない。

離れることができなかった。

「鈴、ごめんな・・・守れなくて。」

そう呟くと突如、雨粒が止まる。

雨音は続いている…止んだ訳ではない。

「いつまでもそこに居られますとお体に悪いですよ、我が魔王。」

ウオズが自分の傘の中に一夏を入れたのだった。

「自分を恨むのは筋違いだ。」

凰鈴音は三条美香の意思を無視し強引にクラス代表になろうとした。そしてその結

果がこれだ。」

「分かっているよそんなこと・・・でも。」

一夏はウオズ傘を払いのけ立ち上がる。

「俺がちゃんと鈴の約束を覚えていたら・・・こんな事にはならなかった！それに三条さんも、俺がいたら。」

「運命に抗うのは難しい。」

ウオズの言い草に違和感を覚える。

そういえば、鈴もウオズに警戒されてた人物・・・あの時自分に警告はしてはいたが深くは言ってこなかった。

まさか・・・、

「・・・ウオズは知ってたんだろ？鈴が死ぬって。」

「……………ええ。未来の情報には三条美香が鳳鈴音を殺害する…そう書かれていました。原因がアナザーIISとは分かりませんでした。」

一夏の頭に血がのぼる。

「なぜ教えなかった！教えてくれたら…俺が止めたのに!!」

「彼女が死ぬのは運命…まだ王ではない貴方には止められません。」

「つく!!」

一夏は拳を握りしめウオズに殴りかかる。

しかしウオズは体をそらし拳をよける。

「避けんな！」

再び拳を突き出すが今度は片手で受け止める。

「そんなこと……やってみなくちゃ分かんないだろ!!」

……親友！人救えない奴なんて王様になんかなれない！

俺は最高最善の王になる男だ：運命なんてこの俺が変えてやる!!」

「我が魔王……」

ウオズは一夏の姿に魔王イチカの影を見る。

そして自分の過去を思い出す。

傷だらけの自分の体。

鳴り止まない爆撃音。

黄金の背中。

その背中を持つ男が自分を見る。

自分は問いた——どうして助けた？と

男：王は答える——我は生れながら王：僕を守るのも王の役目。

正直のところ過去の主人が自分の知る主人では無いと疑っていたウオズ。

しかし彼の本質は未来になっても変わっていないと悟る。
「全く…世話のかかる我が魔王だ。」

ウオズは一夏の拳を離す。

「分かった。非を認めよう…すまなかつた。我が魔王。」

謝罪を込めて軽く頭をさげるウオズ。

「…え」

実の所、彼は鈴を見捨てた事に少しばかり罪悪感を覚えていたのだ。

魔王の為だったら犠牲は惜しまない、と決心していたウオズであったが、心のどこかに残っていた人間の良心が彼をそう思わせた。

「お詫びに、鳳鈴音の運命を変えろる手段を教えよう。」

ウオズは鈴は救えると言おう。

「え、どういうことだ？」

しかし疑問が出る。

鈴はすでに死んでいる…死んだ者どう救うのか。

「簡単だ。」

ウオズはファイズフォンXを操作する。

『タイムマジーン』

するとウオズの上空の空間に穴が空き一機のバイク型の飛行物が現れる。

ウオズのタイムマジーンだ。

「そうか、過去を変えれば鈴が救える！」

「しかし運命というのは呪いみたいなもの……いつまでも纏わりつく。過去改変で一時的に彼女を救えたとしてもいつかの未来、彼女はまた死の運命辿る可能性がある……それでも救うのかい？我が魔王。」

ウオズは一夏の目を見る。

「当たり前だ、そんな運命なんて俺が打ち砕く！」

第七話 怒りのドラゴン 後編

四日前

「私に関係無いわ。しのごの言わずに変わりなさいよ！」

鈴は純子をどかし、美香を突き飛ばした。

「うー！」

「美香!!」

美香は思いっきり地面に尻餅を付き、怯える目で鈴を見る。

「ヒョロっちいわね、もつと筋肉つけなさい筋肉。そんな貧弱じゃあ日本代表なんて無理ね。」

現代表候補生の私が言うんだから確かだよ。」

「なっ！なんですって・・・あんたいい加減に!!」

「強い人が代表になった方がいいんじゃない？ 貴女達もデザート券が手に入るし、私は試合に出れる。」

ウエンウエンな関係ってヤツ。」

おそらくWIN—WINと言いたいのだろうが

今は突っ込んでいる場合ではない。

「あなたね!!」

それを聞いた純子が今にも殴りかかりそうな剣幕で鈴に向かっていく。

「鈴—」

しかし、その間に一人の男が割って入った。

「い、一夏?!」

「お、織斑君?」

その人は先ほどまで第二アリーナにいた筈の織斑一夏だった。

正確には未来の織斑一夏だ。

ウオズのタイムマジンで過去へ飛び、アナザー甲龍が生まれる前の時間に鈴を止めるべく、そしてもう一人の生徒を救うべく降り立った。

「何やってんだよ…鈴—」

一夏は鈴に強い眼差しを向ける。

その瞳は姉の織斑千冬に瓜二つ、鈴は少ししたじろぐ。

「あ、あんたには関係ないでしょ!」

「いいや、関係あるさ…今のお前、最低だぞ!」

「何ですって!!」

鈴は顔を真っ赤にさせ一夏に詰め寄る…しかし、一夏はひるむことなく彼女の瞳をじつと見た。

「三条さんにはな、お姉さんが居たんだ…日本の代表候補生で優秀な選手だった…けど、不治の病で亡くなられた。」

「!?!」

「な…なんで。」

一夏以外の三人が驚く。

「彼女は亡くなる前にお姉さんと約束したんだ、姉の代わりに自分が

日本代表になるって。そして今日までずっと努力を積み重ねてた。」

「…何でその事を。」

「ごめん三条さん、未来の貴方に聞いた。」

タイムマジンで過去に行く前の三日間、鈴の墓参り以外にも一夏は怪人化によってダメージを負っていた彼女にもお見舞いに行っていた。

その時、三条美香自身から、なぜ代表を目指しているかその理由を聞かされていた。
「??」

過去の三条美香は当然、一夏の言っている意味がわからなく、頭にハテナを浮かべる。
「お前も努力家だから彼女の気持ちかわかるはずだ！彼女には彼女の夢があるのに…お前それを強引に奪おうとしているんだ！」

「……………」

「目を覚ましてくれ…お前が俺と戦いたいのは分かっている。相手ならいつでもしてやる。だけど、人の気持ちを簡単に無視して無理やり夢を奪うのはやめろ！そんなの俺の知っている『鳳鈴音』じゃない！」

一夏の声が当たりに響く。

鈴は始めてみる一夏の表情に驚きながらも自分の愚行を思い返す。

「……………」

「ウオズ、三条さんを。」

一夏は近くに待機していたウオズに三条美香の保護を任せる。

これによって、三条美香がアナザーISになることなくなった。

「さあ、こちらに。」

「うん…行く、純子ちゃん」

「あ、うん。」

三人が去り、その空間にしばらく沈黙が流れる。
数分たち鈴がポツリと呟く。

「何なのよ……。」

一言……その一言でまるでせき止められていた川のように次々と言葉が出る。

「人の気持ちち人の気持ちって……私の気持ちなんて全然分かってないくせに！偉そうに言わないで！」

鈴の頬に涙が伝う。

「あんたなんか……あんたなんか!!」

衝撃砲を部分展開しようと、ISを呼び出そうとするが。

「鈴!」

鈴は一夏によって抱きしめられる。

「い、一夏!」

急なことに驚く鈴。

一夏は彼女を落ち着かせるようにそつと頭を撫でる。

「分かっているよ……ごめんな、鈴。」

三日間ずっと悔やんでいた、後悔していた。

そして考え続けた・・・鈴のあの時の言葉の意味。

過去に降り立ち一夏はようやく鈴に謝ることができた。

「え？」

「そうだな、俺も人の事は言えない。後から分かったんだ・・・前の約束の意味。俺の勘違いじゃなかったら・・・」

好きって意味だったんだろ？

一夏は呟く。

「……………あ。」

少し引き離れたところで、一夏の瞳にも涙が浮かんでいることに気づく。

そして理解する、彼は自分のことを想って叱っているのだと。

「ごめん、気づけなくて・・・人の気持ちが分からない王様なんて笑っちゃうよな。でも、自分の思い通りにならないからあれこれ構わず攻撃するのは、悪者と同じことだ。鈴・・・お前は違うだろ？」

「ご、ごめんなさい・・・一夏・・・私。」

そして鈴は後悔する、自分の愚行で他人を、愛する人を傷つけたことに。

「俺もごめんな・・・鈴」

指で鈴の涙をそつと拭う一夏。

そしてニカつと微笑みを浮かべ、鈴にいう。

「……後で三条さんにも謝ろうな。」

「……うん。」

一夏は鈴から離れ、三条美香の元へ行こうとするが……

世界にノイズが走る。時間が止まったのだ。

「な……なんだ」

体が動かない、まるで金縛りにあっているような感覚だ。

そして、彼の前に一人の少女が現れる。

タイムジャッカーのリアスだ。

『あーあー、何してくれてんの?』

「お前は……。」

少女は一夏に向かって手をかざす。

「ぐあ!!」

「一夏!!」

時が動き出し、一夏は謎の力によって吹き飛ばされ、近くの樹木に体を強く打ち付ける。

「あなた一体!・・・うつ」

鈴は、目の前に現れた少女に対してかなり警戒をするが、またもや謎の力によって深い眠りにつく。

「り、鈴!!お前・・・鈴に何をし・・・た!?!」

痛む体を抑えながら立ち上がり一夏は目の前の少女を睨みつける。

『大丈夫だよー、ただ寝かしたただだよ?あーあ、せっかかない契約者を見つけたのに、台無しにしてくれちゃってさー』

「契約者って・・・まさかお前がウオズの言ってた!」

『そう、タイムジャッカー『リアス』だよー。』

リアスはよろしくーと両手を振る。

「お前が・・・お前の目的はなんだ!」

『うーん、君を倒すことと新たな王の創造だよ。』

「俺を・・・殺すのか?」

『いやいやー私が貴方を倒しても意味がないよ！』

アナザーIISが君を倒さないと王の力を継承することできないんだよねー、面倒なことに。』

「我が魔王！」

二人を寮に送り届けていたウオズが異変を察知し、一夏の元へ行く。

そして目の前のタイムジャッカーリアスの存在に気付き、盾になるように一夏の前に立つ。

『ウオズかー、やってくれたね君？過去改変は禁忌だよ？』

「タイムジャッカーリアス・・・君が言うかね、そのセリフ？」

『まあいいや、計画変更。』

リアスは側に生えている木に向かって右手を伸ばす。

すると何かの力が働き、掃除機みたいに木の陰に隠れていた者が引き寄せられ、ある一人の女子生徒がリアスに捕まる。

「きやあ!？」

「な!?!君はさつきなの。」

捕まったのは三条美香の友達、村上純子だった。

純子は美香と共に寮へ帰宅していたが、一夏と鈴の様子が気になりこっそりと木の影

から二人を見ていたのだ。

リアスはアナザーウオッチを彼女の腹部に当て、『甲龍アナザーウオッチ』を生成、そして強引に彼女をアナザーISへと変異させる。

『甲龍…。』

『今ここで織斑一夏を抹殺することにするよ。』

タイムジャッカーリアスはその場を去り、後のことをアナザー甲龍に任せる。

『ぐつるるるるあああああああ!!』

アナザー甲龍は雄叫びを上げ、ウオズと一夏に襲いかかろうとするが、近くで意識を失っていた鈴の存在に気づく。

まずいと、一夏は白式を呼び出そうとするが、それをウオズが止める。

「まっつてくれ、我が魔王。」

「ウオ・・・ウオズ！なんで！このままだと、鈴が！」

「今の状態の貴方に無理をさせるわけにはいかない。

それに過去で白式を展開すると色々と面倒なので、ここは私が。」

無許可でのIS展開が禁止されているのもあるが、

現在この時空には白式が二つ存在している状態、もし展開してしまうといろいろと混乱する事態を引き起こす可能性がある。

それを避ける為にI Sとは違う兵器を用いてアナザーI Sに挑む。

「ど、どうすんだよ?」

「甲龍ミライドウオッチをお借りします。」

「わかった。」

一夏はウオズに甲龍ミライドウオッチを手渡す。

ウオズはそれを腕のホルダーにつけ、そして入れ替えるようにもう一つのミライドウオッチを取りだしリユーズを押し。

『ウオズ』

「う・・・ウオズ?」

自分の名前が入ったミライドウオッチ?という疑問を浮かべる一夏。

ウオズの腰に白式・超越に付いてた同型のドライバーの色違いが現れ、同じ要領でミライドウオッチを装填する。

『アクシオン!』

白式とは違ったリズムの待機音が流れ、ウオズの背後にスマートウオッチ型のヴィジョンが現れる。

ウオズは左腕を広げ、そしてそのまま勢い良くレバーをドライバーに押し込む。

「変身！」

『投影！フューチャータイム』

スゴイ！ジダイ！ミライ！カメンライダーウオズ！ウオズ！！』

そして装着される見た事ないワードスーツ。

「我が名はカメンライダーウオズ…未来の創造者である！」

額に『カメン』というマークがついた頭部に銀色のアンダースーツ、そして全身に走る黄緑色のライン。

複眼は一夏の『IS』とは違いタイムマジンと同じ『ライダー』の文字…その見た目はまさにスマートウォッチの擬人化。

以前、ウオズが言っていた専用機に当たるモノ…それが今ウオズが身にまとっているモノなのかと理解する一夏。

『ジカンデスピアー！カマシスギ！』

ウオズはジカンデスピアーを構えアナザー甲龍に斬りかかり、ターゲットを鈴から自分へと逸らす。

『がっあああああ!!!』

アナザー甲龍は喚きながら衝撃砲を撃つがジカンデスピアアのツエモードで発生させたバリアによって防がれる。

ウオズはバリアを張りながら、タブレットPCを開き音声入力で文章を書く。

『抗戦するアナザー甲龍だったが、ウオズのフューチャリング甲龍に手も足も出ないのであつた。』

タブレットを閉じ、一夏から預かつた『甲龍ミライドウオッチ』を取り出しリユーズを押す。

『甲龍』

そしてウオズミライドウオッチと入れ替えレバーを入れる。

『投影！フューチャータイム！甲・燃・龍!!フューチャリング甲龍！甲龍!!』

白式と同じ能力・・・ウオズの姿が変わる。

龍の様なツノが生え、ピンク色の装甲がまとわれる。

両肩のスマートウオッチ型の肩当『インストールシヨルダー』が衝撃砲へと変形し、複眼が『ライダー』から『甲龍』へと変化。

ウオズもまた中国の第三代IS『甲龍』の姿を投影したのであつた。

二つの衝撃砲を打ち、アナザー甲龍を怯ませる。

抗戦しようにもウオズのタブレットの効果で一切の攻撃を与えることができずアナ

ザー甲龍はウオズが持つ青竜刀で翻弄されていくのであった。

そしてある一定のダメージを与えると、ウオズはレバーを引き、ウオッチのエネルギーを青竜刀に流し込む。

『ビヨンドザタイム！舞え舞え切り!!』

舞いながらアナザー甲龍を切りつけ、最後に両肩の衝撃砲でとどめを刺す。

『ぐああああああああああ!!』

アナザー甲龍は撃破され、元の姿『村上純子』に戻り、アナザーウオッチは体内から飛び出し消失する。

「す……すげえ。」

「いえいえ、貴方ほどではない。」

苦戦することなく、アナザーISを倒したことに感心する一夏。

「うう……私は。」

「君はまっすぐ保健室に行くんだ。」

「え、あ……うん？あ、わかった。」

アナザーISになってから直ぐウオズに倒されたおかげで彼女は精神汚染を免れ軽傷で済んだ。

意識が朦朧としながらもウオズの言うことを聞き入れ、のろのろと保健室へと歩き出す。

念のためタブレットPCに彼女が保健室へ行き着くように記入し、そのまま変身を解きながら一夏の方を向く。

「過去改変は成功した・・・では、現代に戻りましょう我が魔王。怪我の手当てをしなれば。」

「ああ、ちよつと待っていてくれ。」

一夏は体に鞭を入れながら立ち上がり、地面に倒れていた鈴をベンチに寝かせる。そして風を引かない様に自分の上着をかけ、そつと呟く。

「また未来でな・・・鈴。」

一夏は待機していたタイムマジンに乗り込み、過去を後にした。

過去改変を試みた結果、鳳鈴音の死ぬ未来は回避された。

現代に戻った一夏達は改変された四日間の出来事をウオズのタブレットを用いて整理した。

アナザー甲龍の襲撃はなくなり、大会は予定通りに開催された。

三条美香の見事な戦術で一度はピンチに陥った一夏であったが特訓の成果が生かされ三条美香を打つことに成功、勝利を手にしたのであった。

優勝は織斑一夏ではあったが三条美香の戦術はある企業に評価され、美香は後にその企業と契約を果たし、2年に上がると同時に専用機を授与することを約束された。

その後クラスメイトが優勝商品であるデザート券を使い三日三晩、『織斑一夏くん優勝おめでとうパーティー』という名の

ケーキバイキングを楽しみ、その最終日に過去から戻って来たことを確認をする。

「鈴は・・・助かったのか?」

鈴の安否を心配する一夏。

改変を行ったがイマイチ実感がわかない。

ウオズは鈴の未来の経歴を見て、死ぬ運命がないかどうか調べる。

「怪しい部分があるが、死ぬ運命は避けられたようだ。」

「そうか・・・よかったのか?」

怪しい部分というのが気になるが、一応は運命を打破することはできた様だった。

「ええ、まさか運命を変えらるとは……まったく貴方という人は恐ろしい、それでこそ魔王だ。」

「(コンコン) 一夏……いる?」

ドアのノック音と共に鈴の声が聞こえる。

鈴の声を聞いたことで彼女が生きているとようやく実感わいた一夏は急いで、扉を開き、鈴の顔を見た。

「鈴……だよな?」

そこにいたのは正しく親友の『鳳鈴音』だった。

「え、そうだけど……どうしたの?」

「いや、なんでもない。」

生きている……一夏は自然と笑みがこぼれた。

「少し話せる?」

「あ、ああ……。」

「私は席を外そう……何かあったら呼んでくれ。」

ウオズは空気を読み一人屋上へ向かう、二人きりとなった一夏と鈴はベットに座わり話をする。

「大丈夫だったか?」

「うん、ちゃんと三条さんに謝ってきた。」

「いや、そうじゃ・・・いや、それもそうだ。」

一夏はタイムジャッカーとアナザーI Sに襲われた時のことを聞きたかったがそれも重要なことだ。

「許してもらえたか？」

「なんとか、ね。」

鈴は少しため息をつく。

「私、ダメね・・・いつつ感情が先走っちゃう。」

「はは、昔からそうだもんな、でも、それが鈴のいいところだと思うぜ？」

「どこがよ？」

「何でもかんでもガツンと物を言えて、バカだけど努力家で。」

「バカってなによ！バカって！」

「ははは、ごめんごめん。」

「もう、バカ。」

中学時代から続いているやり取りに懐かしさを覚えながら、あることを思い出す。私、嫌なヤツだったわよね・・・昔、私をいじめていたあいつらと同じ。」

中学時代、中国から来た転校生と言うことでいじめの対象になっていた鈴。

自分をいじめていた子も先日の自分のように他人の気持ちを考えないで罵詈雑言を浴びせてきた。

その窮地を助けてくれたのはたった一人・・・織斑一夏だった。

一夏はいじめが嫌いだった・・・だから、自分がいじめっ子と同じ存在になつてしまつたことに後悔を覚える。

「いや、鈴は彼奴らとは違う・・・しっかりと謝れたじゃねーか。」

しかし、違うと一夏は力強く言う。

あの時のいじめっ子と決定的に違うところ、それは自分から謝罪ができたことだ。

その言葉に鈴の気持ち少し晴れる。

「ふふ、ありがとう・・・それと、コレ」

鈴は手に持っていた袋を一夏に渡す。

「これは・・・。」

「あの時・・・なぜかベンチで寝ていた時にかけてあつたヤツ・・・一夏のもでしょ?」

中に入っていたのは先ほど一夏が鈴にかけてかけた上着だった。

綺麗にアイロン掛けされている。

「ああ」

「ありがとう、でもなんで起こしてくれなかったのよ!」

どうやらタイムジャッカーやアナザーISSのことは覚えていないようだ。
「あ、いや、気持ちよさそうに寝てたから、つい」

一夏は下手なことは言えず、適当に誤魔化す。

「まあいいわ……いい匂いだっただし。」

「え？」

「な、なんでもない！」

思わず口が滑った鈴であった。

「そのさ、あの時、約束の意味がわかったって言ったじゃん。」

「そう……だな？」

鈴は顔を赤くする。

「その、へへへ、返事と……とかは？」

「あー……。」

一夏は困っていた。

鈴は大切な親友だ。

一緒にいて愉快だし、鈴のことは好きだ。

ただしそれが恋愛感情なのか聞かれたら、わからないと答える。

長らく返答に困っていると、鈴がいきなり立ち上がる。

「・・・やっぱいい!」

「え?」

「断れて関係悪くさせたくないし・・・今のままでいい!!」

鈴はくるつと一回転し一夏を見つめ、彼の唇に人差し指を当て

「ただし覚悟しなさい!絶対に振り向かせてみせるから!いっばいアピールしちゃうから!」

と笑顔でそう言った。

「・・・わかった。」

一夏もそれにつられて、笑顔になり部屋中に笑い声が響いた。

「この時代に来ていたのか・・・カッシーン。」

同時刻、ウオズは屋上である人物と会話していた。

「貴様、無駄な時間改変をしたようだな。」

ウオズの背後に立っているのは槍を持った金と黒の怪人・・・『カッシーン』

彼は未来からウオズがいるこの時代に来ていた。

「無駄ではない、我が魔王が望んだことだ。」

「お前の主人は魔王イチカ・・・過去の織斑一夏ではない。」

ウオズは振り返り、カッシーンを見る。

頭部にはカメンライダーウオズと同じ『カメン』の文字が入ったマークが小さく入っている。

これは魔王イチカの僕という証であり、彼はウオズと同僚に当たる存在だった。

「それで、私になにかようで？」

「来に食わん態度だ、まあいい・・・我が魔王からお前に褒美だそうだ。」

カッシーンは紅いミライドウオッチを差し出す。

「これは・・・。」

「来るべき未来で必要になる・・・持っとけ。」

ウオズはそれを受け取り、ホルダーではなくタブレットPCにかざし、データ状でその中に保存する。

「要件は済んだのだから？早く元の時代に戻ったらどうだ？」

「言われなくとも。」

カツシーンはウオズとは別のタイムマジンで未来へ戻ろうとするが、少し足を止め前を向いたままウオズに話しかける。

「お前にもし不手際があつたら私が後を引き継ぐ、せいぜい頑張るんだな。」

「私は常に我が魔王のために尽くしている、お前の出番はない。」

「だといいいがな。」

そう言い残し、カツシーンは未来へと帰還した。

ウオズは星空を見上げ、現状を整理する。

かくして、我が魔王の過去改変により鳳鈴音の死の運命を打破することに成功した。

しかし、この行為が今後の未来に良い結果を招くかどうかは不明だ。

どっちにしろ、二つ目のミライドウオッチは手に入った、着実に我が魔王は王への道を進みだしている。

今後起こるであろう偽りの戦姫の事件・・・流れからするにこの事件にもアナザーI

Sが関わってくるかもしれない。

我が魔王のためにも、真の歴史へと彼を導かなければならない・・・やることは山積み
みのようだ。

第八話 ギンギラな悪夢

「やったな！箒！セシリア！鈴！シャル！ラウラ！」

一夏は歓喜した。

場所は何処かの海域。仲間と共に強敵に打ち勝ち、一夏たちは勝利の余韻に浸っていた。しかし、その余韻は日の出と共に現れた者によつて終止符を打つた。

隕石だ。

隕石様に巨大な結晶の塊が彼らの目の先で墜落。

表面の熱で海は沸騰し、水蒸気爆発と共に結晶は、木っ端微塵に砕け散る。

『……………は!!』

水蒸気を振り払い、中から現れたには人型。

未確認円盤のようなハットを被り、惑星の軌道図のようなアンダースーツ。そして所々に恒星や惑星が描かれた円形のパーツはその者が宇宙から使者という事を表していた。

「な、なんだ!?!」

「ISS……じゃないわね。」

『そうだ。』

宇宙からの使者は黒いマントをなびかせながら、手のひらにエネルギーを溜め、黒いISSを纏う銀髪の少女ラウラに警告なしに打ち込む。

「な!?!がああ!!」

たった一撃で黒いISSのシールドエネルギーが底をつき少女は生身で海面へと投げ出される。

「ラウラ!!あんた!!」

それを見た鈴が激情し謎の使者に青龍刀で攻撃を仕掛けるも、手の平に生成された透明な球体によって跳ね返され、ラウラに当てた同じ技を鈴に食らわせる。

「つがぁ!?!」

鈴のISSも消滅し、彼女も海面へと消える。

「鈴!! クソ!行くぞシャルロット!セシリア!一夏!」

「分かった!」

「援護はお任せを。」

紅いISSを纏った箒を先頭に攻撃を仕掛ける三人

「ま、まで!」

一夏の脳裏に悪い予感が走る。

「な!？」

「ぐあ!？」

三人の攻撃は謎の使者には全く通用しなかった。

箒の近接攻撃は謎の力のよって動きを封じられ、シャルの銃撃を箒を肉壁にする事で防じ、セシリアのレーザー攻撃も使者が手をひと捻りするだけで射線を曲げられ、そのままシャルに命中する。そしてトドメとして使者は星々をかき集める様に生成したエネルギー光弾を肉壁にしていた箒に向けて解き放ち、そのままの流れで両腕に新たに生成した太陽の様に燃え盛る火球をセシリアとシャルに投げつけ三人目を無慈悲に葬った。

謎の使者はあざ笑う。

『ははは…無意味な事を』

「皆んな!!…お前ええええ!!」

一夏は仲間の仇を打とうと攻撃を仕掛けるが攻撃は当たらなかつた。

外した訳ではない、いくら雪片で攻撃しようともすり抜けてしまうのだ。まるで実態のない幻影を切っているような感覚。

「な、なんで。」

使者は口を開く。

『全宇宙を支配する不変の法はただ一つ……全ての物は滅びゆく!』

使者は両腕で円を描きながら巨大なエネルギー光弾を生成する。

「な……なんなんだお前!!」

『我が名は……カメンライダー……ギ……ンガ』

使者は名乗るも声がかすれ上手く聞き取れない。

「え?」

『宇宙の裁……を……が……我が……魔』

次第に視界にノイズが走り使者とは違う声が紛れ、だんだんと意識が覚醒していく。

「なんて?」

『キバ……て……我が魔王!!!』

「我が魔王!!!」

目を開くとそこにはウオズの顔。

急に視界に飛び込んできたウオズに驚き一夏は飛び起きる。

「うわ!?!」

「よかった…：ようやくお目覚めになられたか。」

「俺は一体。」

周りを見渡す。

場所は教室の自分の席。ウオズ以外に箒とセシリアが自分を心配そうに見つめていた。

「セシリア・オルコットのサンドイッチを食べて気絶してたのです。」

一夏の質問にウオズが答える。

「ああ…：そうだっけ。」

一夏は思い出す。

今朝、寝坊して朝食を摂らなかつた事を話していたらセシリアから自分のために作ってくれた昼食用のサンドイッチの一つを手渡され、自分は好意を断りきれずに意を決して食べてしまったのだ。

先ほど体感していたのはセシリアのサンドイッチによって生み出された悪夢。

一夏は夢であつた事に対しホツと胸をなでおろす。

「全く…：目を離すとすぐこれだ。これで6回目。これ以上セシリア・オルコットの手料理を食べるはやめて貰いたい。」

「でも…。」

せつかく自分の為に作ってくれた物を粗末にするなど。

最高最善の王を目指す一夏にとっては難しいことだった。

「でも」ではありません…それに。」

ウオズはセシリアを睨みつける。

「セシリア・オルコット…お前は殺人犯になりたいのか？これ以上一夏君を苦しめるのはやめて頂きたい。」

「そんなつもりはありませんわ。一夏さんには神の才能で作り出された美味しい美味しい愛情を込めた手料理を食べさせてあげたいのです！」

「セシリア・オルコット…この際はつきり言いましょう。貴女に料理を作る才能は無い…この際二度と料理ができない様にして差し上げましょうか？」

「まあ、なんて野蛮な。」

未来ノートを使えば可能だ。

流石にそれはまずいと思い一夏は二人の間に割って入る。

「ま、まあまあ！セシリアも悪気があつた訳ではないしね。」

「一夏君…しかし。」

「おーら、皆席につけー。」

納得しないウオズのセリフは聞きなれない男の声によって遮られる。

ワイシャツの上から白衣を着た癖つ毛のその人物は教卓に立ち出席名簿を開きながらクラス全体を見渡した。

その男は学園の教員の一人であった。

「え、誰?！」

見慣れない人物に一夏は声を上げて反応する。

「そうか、一部の人は会うのが初めてか。俺は選択授業の宇宙工学担当教員『多杉銀河』だ。山田先生と織斑先生は多忙な為、朝のSHRは俺がする事になった。」

一夏は宇宙工学を選択していない為彼と会う機会が無かった。

「男の先生も居たんだな。」

「俺はお呼ばれだ。この学園の正式な講師では無い。」

多杉は生徒の名前を読み上げ一通り点呼を取ると、改めて目線をクラス全体に移す。
「さてと、いきなりで悪いんだが転校生を紹介する。」

おーい待たせたな、入ってくれ！」

多杉は廊下に待っている転校生を呼び出す。

扉が開き教室に入ってきたのは中性的な顔立ちをした金髪の美少年だった。

「初めまして、シャルル・デュノアです。」

「お、男？」

生徒の誰かが反応する。

「はい、同じ境遇の人が居ると聞いてフランスから来ました。」

入ってきたのはまさかの男性だった。

同じ境遇と言うことは一夏と同じ男性適正者。

まさかの転校生に女子生徒達は歓声を上げる。

「「きゃあああああああ!!」」

「男よ！三人目の男！」

「常盤君と織斑君とは違う王子様系！」

「守ってあげたいタイプ！」

「あれ、どこかで…。」

一夏は初対面の筈のシャルルに既視感を感じていた。

何処で見たことがあるような…しかし思い出せない。

「うっぐ、朝から元気がいいなこのクラスは…織斑先生も大変だ。」

多杉は耳を塞ぎながらこの騒がしいクラスの担任を思い浮かべながら苦笑いする。

「あ、ははは……。」

シャルルもそんな多杉のセリフに同感する。

「織斑君と常盤君……悪いけど彼の面倒を見てやってくれないか？ 同じ男同士気は楽だろう。」

「はい、わかりました。」

「俺も授業の準備があるからこれでSHRは終わりだ。自己紹介は各自でね。ではまた！」

多杉は教室出て、準備室に向かおうとするが、胸ポケットに入っている携帯電話が震えだす。

「もしもし、俺だ……ってお前か……学校にいる時は電話するなって言っただろう？」

電話の相手に多杉は呆れ顔になる。

「お前がこの学園に送り出したんだろ？ お陰でこちとら多忙な日々だ。……なに？……はいはい、分かったよ。分かりましたよ。」

多杉は降参だと言わんばかりに手を上げ、携帯電話を耳から話す。

「じゃあ後でな、東。」

そう言い残し、多杉は目的地に向かった。

第九話 宇宙の彼方の：

多杉銀河はI S学園の特別講師だ。

自分の授業を終え、車を自宅に向けて走らせていると、ある者がその行手を阻んだ。

「うおおっおお!!」

道路の真ん中に人が現れて急ブレーキをかける多杉。

その者は向かってくる車に対し逃げはせず、そのままバンパーの上に足を乗せ強引に車を止める。

「だーあぶねーだろうが!!!」

多杉は車を急いで降り轢きそうになった相手に怒号を浴びせるが、その者が直ぐにI S学園の生徒だと気づく。

「つて、あれ…お前確か一組の…。」

I S学園の唯一の男子生徒、名前を忘れるわけない。

「常盤…お前ここで何やってるんだ。」

制服に長いマフラーという奇抜なファッションをしている生徒は記憶の中で一人しかいない。

常盤ウオズだ。

「多杉銀河…少し私に付き合っつて貰いたい。」

IS学園では一組と二組が合同で実技授業を行なっていた。

その最中、一夏は自分の姉から向けられる視線に耐えていた。

「あー、えつと…ウオズは…その。」

ウオズはSHRの後すぐ「私は今日の授業には出ない」と一言だけ言い残し何処かへ行つてしまった。

千冬の授業をすっぽ抜かすなど自殺行為に等しい所業をやり遂げたウオズをどうにかして庇おうと一夏は色々と言ひ訳を考える。

しかし姉の視線は刃物同然、首元に刃を突きつけられた感覚に陥り、一夏の頭は真っ白になる。

「何だ？はつきり言え！」

「その、えーつと…「欠席する」つて。」

嘘はつけない。

そう判断した一夏は大人しく正直答えた。

「…そうか、分かった。」

「え？」

しかし予想外の事に千冬は案外呆気なくウオズの欠席を認めた。

その違和感と驚きに思わず声が出てしまう。

「授業を始める！整列しろ!!」

千冬はそんな一夏を他所に、両手を叩き生徒に整列する様に指示を出す。

「今日の合同授業の内容は実技だ。手始めに代表候補生には一回模擬戦をしてもらう。

相手は…」

「きゃああああ、退いてください!!」

千冬が言い終わる前に空から声が聞こえる。

上を向くとI Sに乗った山田先生がこちらに向かって落下しているのが見える。

「退いてええええ!!」

周りの生徒は急いで避難をするがこのままだと山田先生は地面に激突してしまう、I Sには絶対防御が有るため怪我などはしないと理解しているが一夏の体は彼女を救おうと勝手に動く。

「危ない！」

一夏は素早く白式を展開し地面すれすれで山田先生をキャッチする。

「大丈夫ですか？山田先生！」

「あ、織斑君…ありがとうございます。」

山田は久方ぶりのIS操縦で手元が狂ってしまいISを教える立場としてコレは恥ずべき姿だと 落ち込むと同時に、今起きている状況に対し顔を赤くする。

彼女は今、IS越しでは有るが男の人にお姫様抱っこをしてもらっている状態だ。

「いーなー山田先生。」

「織斑君にお姫様抱っこされてるー。」

「いや、あの、これは／＼」

生徒に茶化され山田の顔はさらに真っ赤になり今にも沸騰しそうな勢いだ。

「まるで白馬の王子さまだね！あ、私うまいこと言った。」

「おもんなし。」

白式と白馬をかけたギャグだろう。

「王子?!いやー照れるなー。山田姫…お怪我は有りませんか?」

王子という単語に反応し一夏は調子に乗る。

「も、もう。織斑君ったら……っひ!?」

一夏の爽やかフェイスに思わず見惚れてしまった山田。

しかし、背後から発せられる殺気を感じ取り、軽く悲鳴を上げながらゆつくりとその方へ顔を向ける。

「…一夏（さん）」

そこには嫉妬と殺気のオーラを纏ったポニーテール、ツインテール、金髪の3人組が一夏を睨み付けていた。

「あ、あの、は、早く下ろしてください！」

このままでは織斑君の身が危ない！

そう感じ取った山田は一夏を急した。

「はい、どうぞお姫様…なんつって！」

「一夏ああああ!!！」

テヘペロと言わんばかりに笑う一夏に対し、鈴の堪忍袋の尾が切れ即座に甲龍を展開し青龍刀を一夏に向けて投擲する。

「危ね!!！」

一夏はそれをギリギリで交わす。

「一夏！あんたねー。」

「おほほ、一夏さん…私という者がありません。」

セシリアも鈴に続きブルー・ティアーズを展開し、殺気を漂わせながら一夏に詰め寄

る。

「お、お前ら…どうした？」

なぜ自分が責められているのか理解できない一夏。

二人に対しじりじりと後退りをする。

「おい、貴様ら。」

しかしその二人は鬼神の殺気によって動きを封じられる。

「「ひい!?!」」

「誰がIS使用の許可を出した？」

規則により無断でISを展開してはいけない。

それを破った鈴とセシリア…ついでに一夏は千冬の逆鱗に触れてしまう。

「山田先生…内容を変更だ。私も参戦する。」

「え!?!」

その後3人は千冬にボロ雑巾の様にされた。

「酷い目にあつた。」

「さ、災難だったね。」

授業が終わり一夏はベンチで横になり疲労した肉体を休めていた。

シャルルは苦笑いを浮かべながら着替えを高速で終わらせて、一夏の隣に座る

「なあ、織斑って呼ぶと千冬姉と被るから気軽に一夏で良いよ？俺もシャルルって呼ぶから」

「分かった、じゃあ一夏って呼ぶね。」

一夏は身をお越し自分も着替えようとロッカーに向かう。

「そう言えばシャルルの部屋割りってどうなるんだ？」

「えっと、山田先生が一夏と同じ部屋だって……。」

「え、じゃあウオズは？」

「常盤君は一人部屋に戻るみたい。」

部屋番は1025号室……かつて箒が使っていた部屋だった。

箒が移動し、ウオズは本来の一人部屋に戻る。

「そっか。じゃあ、これから宜しくなシャルル……よいしょ。」

「うん……って、うおあ!？」

一夏はISスーツを脱いだ瞬間、シャルルは何故か顔を両手で覆い隠す。

「ん？どうしたんだ？」

「な、何でもない！僕は先に戻ってるね！」

「お、おう。」

シャルルは荷物を纏めて駆け足で更衣室を出て行く。

（あ、そう言えば…ウオズはシャルルの事をどう思っているんだろう。）

なにかと自分に近い人物に対し異様な警戒心を見せていたウオズ。

シャルルも唯一の男性適性者という事で今後深く関わっていくだろう。

彼もまた自分の命を危険に晒す存在であるか否か…今度あつたら話を聞こうと考える一夏であった。

「大丈夫バレてない。」

更衣室を出た彼は壁にもたれ掛かり息を整える。

男の体を見慣れてない自分には、鍛えられた一夏の体は些か刺激が強すぎた。

彼…いや彼女は自分の置かれている立場を整理する。

シャルル・デュノアは本名ではない、唯一の男性適性者である織斑一夏に近づく為

名付けられた偽りの名だ。

父が経営しているデュノア社は現在、IS開発の遅れで経営危機に陥っている。

それを打破する為、篠ノ之東が直々に完成させたい第3世代IS『白式』のデータが必要だった。

男と偽ったのは織斑一夏に接触しやすくする為。

自分の役割は彼の間を見て、デュノア社に白式のデータを送る事。

もしバレてしまったら…考えたくもない。

(なんで、こうなったのだろう。)

母が死に父の元で嫌々働かされる毎日。

こんな犯罪までやらせるなんて…。

(僕は…唯普通に生きたかった…昔に戻りたい。)

だが此処まで来てしまった…後戻りはできない。

いざバレてしまったらコレを使って逃げれば良い。

シャルルは鞆から謎の少女からお守りとして貰った…黒いアナザーウオッチを取り出し祈るようにそれを握りしめた。

同時刻

ウオズは多杉を連れ、無人の採掘場跡地に来ていた。

「おいおい、ここってよく特撮で使われる採掘場じゃねーか…何？撮影でも始まるのか？お前もしかして東〇の関係者か？」

危機感のない多杉に対し眉をひそめるウオズ。

軽く咳払いし口を開く。

「多杉銀河…：単刀直入に聞こう。君は何者だ？タイムジョッカーか？」

「な、なに？未来戦隊？いや、それはタイムレンジャーか…。」

多杉のボケをスルーし自分のタブレットPCを見るウオズ。

多杉銀河…：ウオズは過去に織斑一夏に関わる人全員の名前を覚えているが、彼の名は知らない。

つまり本来この時間軸に存在しない人物。

ウオズにとつて彼の存在はイレギュラーだった。

「私はお前を知らない…：このタブレットに多杉銀河と言う名は記されていない。つまりお前は本来この時間に存在しない筈の人間だ。」

「ひ、酷い良い様だな…：なんの話かさっぱりだ。俺が何者かだつて？朝言つたじゃねーか。俺はIS学園の教員だ。」

「悪魔でも惚けるつまりか…だったら私にも考えがある。」

未来のタブレットに名前が書かれていない存在…ウオズと同じ未来人かタイムジャツカーの二択しかない。

どっちにしろ未来人の介入は歴史を変えてしまう。

ウオズが取る行動はただ一つ。

『ウオズ』

「変身。」

『カメンライダーウオズ！ウオズ！』

ウオズはカメンライダーウオズに変身し武器を構える。

つまり排除だ。

『ジカンデスピアー！ヤリスギ！』

「な、ななにい!?変身した!?!」

目の目で特撮ヒーローの如く変身したウオズに驚く多杉。

『我が魔王の覇道を邪魔をする者は誰であろうと倒す。』

生身の人間にも関わらずにウオズは容赦なく攻撃する。

「つく!!危ねえ!!」

多杉はなんとかウオズの猛攻を躲す。

「はあ…アイツの言っていた事はこの事か！」

『…何の話だ？』

多杉の謎めいたセリフ思わず動きを止める。

「束が言うこともたまには役に立つな。」

『束だと？篠ノ之束の事を言っているのか？』

篠ノ之束…その名を聞いた瞬間ウオズは額に汗をにじませる。

「そうだ、かの有名なISの生みの親、篠ノ之束だ。俺は彼女とちよつとした縁があつてね。IS学園に来る際にお前に注意する様に言われてたんだ。まさかお前がそんなとんでも兵器を持っているとは思わなかつたが。」

多杉は白衣についた砂埃を払いながらウオズのカメンの文字を睨む。

「常盤ウオズ…お前こそ何者だ？束が言うにはお前は白式に何らの細工をして彼女の計画を妨害しているらしいが…もしかして亡国企業か？織斑一夏に何をしようとしているか？」

『あんなのと一緒にはしないでくれるかい？私は彼を王への道…霸道へと導いているだけだ。彼が向かうべき未来の為に。』

「へ、胡散くせーな。だったら俺は一教員としてお前の胡散臭い計画を止めてやるよ。」

多杉は両足をガツと広げ、力強く地面を踏む。そして右腕を天にかざし、キザな表情

を浮かべる。

「なんせ俺は教師にして、この宇宙の平和を守る為に戦うヒーローなのだからな！こい！ギンガアドライバアアアアアアアア！」

多杉が叫んだ瞬間、彼の腰に円盤型のバックルが嵌められたドライバーが現れる。

『なっ！』

「変身!!」

多杉はドライバーの円盤を強く叩く。

『ギンギンギラギラギラクシー！宇宙の彼方のファンタジー！』

音楽と共に多杉と似た声の音声が辺りに響き渡る。

『カメンライダーギンガ！』

星空の様なマントを靡かせ、未確認円盤のような物を被った仮面のヒーロー。

カメンライダーギンガがここに参上した。

『俺は宇宙からの使者、カメンライダーギンガ!!』

ギンガはポーズを決めるとスーパー戦隊よろしく後ろが大爆発し、彼の登場を派手に際立たせる。

その様子に思わず啞然としたがウオズだが直ぐに彼が自分の敵だと理解し、ジカンドエスピアアを構える。

『カメンライダーだと？カメンライダーは我が魔王に仕える戦士の称号だ。お前などが名乗って良い物ではない！』

『は！知らねーな。仮面のヒーローだからカメンライダーって名乗っているただけだ！』
今まさに過去でライダーバトルが勃発する。